

平成27年度
大規模肉用牛経営動向に関する調査報告書



平成28年2月
独立行政法人農畜産業振興機構

はじめに

この報告書は、株式会社工業市場研究所に委託して実施した平成 27 年度大規模肉用牛経営動向に関する調査の成果を取りまとめたものである。

肉用牛経営においては、もと畜費等の上昇により生産費の増加が経営を圧迫している。そのため、増頭による規模拡大や繁殖部門までを取り入れた一貫経営の推進、ブランド化による販売増加や輸出などの取り組みが行われているが、肥育牛部門での黒字化は困難な状況である。黒字を計上している経営体は、他の農業との複合経営や6次産業化等、先進的な取り組みが成功しているケースと考えられる。

このような状況下において、大規模肉用牛肥育経営の生産実態に関するデータが少ないことから、アンケート調査により大規模肉用牛経営の現状を把握するとともに、先進的な経営の取り組みを行っている事例について現地調査を実施し、安定的、効率的な肉用牛経営の推進に資することを目的として調査結果を取りまとめた。

本報告書が肉用牛生産農家及び関係者に広くご活用いただき、今後における何らかの参考になれば幸いである。

最後に、本調査の実施にあたって、ご協力いただいた調査対象農家、関係者各位に深甚の謝意を表する次第である。

平成 28 年 2 月

独立行政法人 農畜産業振興機構

目次

【調査概要】	1
【要約版】	3
【詳細版】	7
1 平成 26 年度の経営概況	7
(1) 飼養頭数	7
(2) 経営土地面積、畜産用地	9
(3) 経営形態	10
(4) 売上高	12
(5) 労働力	14
2 生産費（肥育牛 1 頭当たり）	16
3 もと畜の導入状況	18
(1) 年間もと畜導入状況	18
(2) もと畜を外部から導入する際の重視点	19
4 肥育牛の出荷状況	23
(1) 黒毛和種	23
(2) 交雑種	23
(3) 乳用種	24
(4) 年間の副産物の状況	24
(5) 市場出荷、相対取引の状況	25
5 繁殖雌牛の種付状況	27
6 飼料の給与状況	28
7 敷料の使用状況	30
8 経営に関する取り組み	31
(1) 現在行なっている経営努力	31
(2) 今後 3 年間の経営展開の方向性	34

【調査概要】

1 調査目的

- 農林水産省が実施している統計調査（以下、「農林水産統計」という。）においては、200頭規模以上の階層の肉用牛経営は一括して集計され、大規模経営の生産実態が十分把握されていない。そのため、大規模肉用牛経営の動向を調査し、肉用牛肥育経営の改善を図るための基礎資料の整備を図るものとする。

2 調査対象

- 全国の肉用牛経営者1,038戸を対象に、349戸から回収（回収率33.6%）。うち有効回答数は289戸（回収率27.8%）。
- 標準誤差率は、黒毛和種1.5%、交雑種3.4%、乳用種4.9%である。

【飼養している肉牛の種類】

	計	200頭以上	200頭未満
黒毛和種	222件	131件	91件
交雑種	130件	74件	56件
乳用種	72件	50件	22件

※複数種を飼養している調査対象があり、合計値が有効回答数とは異なります。

【地域別の調査対象の分布】

No.	都道府県	戸数 (n)	割合 (%)
1	北海道	45	15.6
2	青森県	12	4.2
3	岩手県	7	2.4
4	宮城県	7	2.4
5	秋田県	1	0.3
6	山形県	7	2.4
7	福島県	6	2.1
8	茨城県	13	4.5
9	栃木県	10	3.5
10	群馬県	8	2.8
11	埼玉県	10	3.5
12	千葉県	7	2.4
13	東京都	2	0.7
14	神奈川県	0	0.0
15	新潟県	5	1.7
16	富山県	1	0.3
17	石川県	0	0.0
18	福井県	1	0.3
19	山梨県	1	0.3
20	長野県	8	2.8
21	岐阜県	3	1.0
22	静岡県	0	0.0
23	愛知県	8	2.8
24	三重県	6	2.1

No.	都道府県	戸数 (n)	割合 (%)
25	滋賀県	4	1.4
26	京都府	1	0.3
27	大阪府	1	0.3
28	兵庫県	3	1.0
29	奈良県	3	1.0
30	和歌山県	1	0.3
31	鳥取県	3	1.0
32	島根県	8	2.8
33	岡山県	9	3.1
34	広島県	9	3.1
35	山口県	5	1.7
36	徳島県	9	3.1
37	香川県	2	0.7
38	愛媛県	0	0.0
39	高知県	0	0.0
40	福岡県	4	1.4
41	佐賀県	9	3.1
42	長崎県	5	1.7
43	熊本県	4	1.4
44	大分県	3	1.0
45	宮崎県	34	11.8
46	鹿児島県	1	0.3
47	沖縄県	3	1.0
	全体	289	100.0

3 調査方法

■アンケート調査（郵送による自記入式）

※調査票を送付前に、電話にて経営状況・飼養品種・頭数の確認、調査協力依頼を行ない、了承者に対して調査票を送付した。

■現地調査は、アンケート調査の回答者の中から5件の牧場を対象に実施（報告書には、内3件を記載した）。

4 調査実施期間

■アンケート調査は平成27年8月～10月、現地調査は平成27年10月である。

5 留意事項

■平成26年度の常時飼養頭数規模別にクロス集計を行った。

■報告書中の図表の「全体」は、不明を含む回答者全体を示す。

■報告書中の「n」は、標本数（回答数）を示す（「number」の略）

■小数点以下を四捨五入して算出した場合、合計と合わないことがある。

■基本的に黒毛和種・交雑種・乳用種別に調査を実施した。ただし、1つの経営体が、黒毛和種・交雑種・乳用種の複数の品種を飼養している場合がある。

6 調査実施者

■株式会社 工業市場研究所

7 調査項目

調査項目	
1.経営概況	1.飼養頭数(うち黒毛和種、交雑種、乳用種、その他)
	2.経営土地面積、うち耕地計(田、畑、牧草地)・うち畜産用地計(畜舎等、放牧地、採草地)
	3.農業従事者数(うち家族、雇用)
	4.家族労働時間
	5.肉牛関連の常時雇用人数・年間臨時雇用人数
	6.経営形態(畜産専業/兼業の区分、肥育専業経営/繁殖・肥育一貫経営/乳肉複合経営の区分)
	7.農業収入(うち肉用牛経営)
	8.農外収入
2.生産費	1.もと畜費
	2.飼料費(うち流通飼料費、牧草・放牧・採草費)
	3.敷料費
	4.光熱水料及び動力費
	5.その他諸材料費
	6.獣医師料及び医薬品費
	7.賃借料及び料金
	8.物件税及び公課諸負担
	9.建物費(減価償却費、修繕費)
	10.自動車費・農機具費(減価償却費、修繕費)
	11.生産管理費
	12.労働費(うち家族労働費、雇用労働費)
	13.支払利子
	14.支払地代
	15.生産費(自己資本利子・自作地地代は含まない)

調査項目	
3.その他経営実績	1.肥育牛1頭あたり平均粗収益((1)主産物価額+(2)副産物価額) (1)主産物(ア.市場出荷・相対取引等の販売手法別販売価格・年間販売頭数・平均枝肉単価、イ.販売時月齢、ウ.販売時生体重、エ.増体重、オ.肥育期間) (2)副産物(ア.数量、イ.価額) (3)肥育牛1頭当たり所得(=平均粗収益-(生産費-家族労働費))
	2.主産物販売先 (1)市場取引と相対取引の比率 (2)相対取引先の比率(ア.個人、法人、家畜商、固定客、イ.県内・県外)
	3.もと畜の概要(もと畜1頭あたり) (1)取得頭数・価格 (2)肥育開始時平均月齢・生体重 (3)もと畜導入価格を決定する要因 ※交雑種、乳用種については、乳用種初生牛と子牛を分けて調査すること
	4.種付けの状況
	5.飼料の給与状況
	6.敷料の使用状況
4.今後の経営意向等	1.今後の経営意向(規模拡大、現状維持、規模縮小) 2.規模拡大を実現するに当たった課題 3.現状維持または規模縮小の理由

【要約版】

1 平成 26 年度の経営概況

(1) 飼養頭数

■平成 26 年度の肥育牛飼養頭数規模別の経営体数の分布は、「200～300 頭未満」17.3%、「300～500 頭未満」16.3%、「500～1,000 頭未満」17.6%、「1,000～1,500 頭未満」8.7%、「1,500～2,000 頭未満」5.2%、「2,000～3,000 頭未満」3.8%、「3,000 頭以上」6.2%であった。

■品種別肥育牛飼養頭数規模別経営体の割合は、黒毛和種が「200 頭以上」で 59.0%、交雑種が「200 頭以上」で 56.9%、乳用種が「200 頭以上」で 69.4%となった。

(2) 経営土地面積、畜産用地

■肥育牛飼養頭数規模別の 1 経営体当たりの経営土地面積（平均）は、200 頭以上の経営体が 44.9ha、畜産用地は、200 頭以上の経営体が 38.0ha であった。

(3) 経営形態

■畜産専業・兼業の状況は、200 頭以上の経営体では「畜産専業」70.5%、「複合経営」16.1%、「兼業経営」12.4%であった。

■経営形態は、200 頭以上の経営体では、「肥育専業経営」が 49.3%、「繁殖・肥育一貫経営」が 23.0%、「乳肉複合経営」が 5.5%、「育成・肥育経営」が 16.1%等となっている。飼養規模の大きい経営体の方が肥育専業経営の割合が高い傾向にある。

(4) 売上高

■農業経営体全体の売上高は、200 頭以上の経営体では、平均 5 億 6,400 万円となっている。

■肉用牛関連の売上高は、200 頭以上の経営体では、平均 4 億 6,400 万円となっている。

(5) 労働力

■肉用牛関連に従事する家族労働力は、200 頭以上の経営体では平均 2.6 人であった。

■肉用牛関連の正社員は、200 頭以上の経営体では平均 6.2 人であった。

■肉用牛関連の非正社員は、200 頭以上の経営体では平均 3.4 人であった。

■肉用牛関連作業における 1 日当たりの平均労働時間は、200 頭以上の経営体では 7.6 時間であった。

2 生産費（肥育牛1頭あたり）

■品種別に見ると、200頭以上の経営体では、黒毛和種 954,286 円、交雑種 691,664 円、乳用種 470,904 円となっている。もと畜費や飼料費の高騰の影響を受けて、生産費は上昇傾向にあり、黒毛和種の実生産費は1頭あたり100万円台に迫る金額となっている。

<生産費（肥育牛1頭あたり）> 200頭以上の経営体

	もと畜費 (円)	購入飼料費 (円)	牧草・放牧・探草費 (円)	敷料費 (円)	光熱水道力費 (円)	消耗諸材料費 (円)	獣医師料及び医薬品費 (円)	賃借料及び料金 (円)	物件税及び公課諸負担 (円)	建物費 (円)	自動車費、農機具費 (円)	生産管理費 (円)	労働費 (円)	支払利子 (円)	支払地代 (円)	副産物価額 (円)	生産費 (円)
黒毛和種	499,341	278,709	24,253	13,025	17,031	2,816	13,852	9,421	7,443	23,687	8,370	5,951	43,384	11,642	4,667	9,307	954,286
交雑種	270,976	281,043	25,273	10,405	12,200	5,606	9,794	6,870	6,839	19,541	7,208	3,947	28,625	7,037	5,714	9,414	691,664
乳用種	131,444	247,000	13,150	11,071	7,241	3,885	6,783	6,650	3,045	11,960	5,895	3,571	16,520	6,053	3,385	6,749	470,904

3 もと畜の導入状況

■もと畜の年間外部導入頭数は、「黒毛和種」が315頭、「交雑種（初生牛）」が462頭、「交雑種（子牛）」が429頭、「乳用種（初生牛）」が590頭、「乳用種（子牛）」が602頭となっている。

■1頭当たりの導入価格は、「黒毛和種」が490,163円、「交雑種（初生牛）」が162,835円、「交雑種（子牛）」が263,080円、「乳用種（初生牛）」が46,440円、「乳用種（子牛）」が128,517円である。

■もと畜（黒毛和種）を外部から導入する際に重視する点は、「血統」「価格」「体型の良し悪し」「健康状態」「発育状態」が上位となっている。交雑種では、「健康状態」「体型の良し悪し」「価格」「血統」「発育状態」、乳用種（初生牛）では、「健康状態」「価格」「発育状態」「体型の良し悪し」、乳用種（子牛）では、「健康状態」「体型の良し悪し」「発育状態」「価格」が上位となっている。

4 肥育牛の出荷状況

■黒毛和種の年間出荷頭数は、200頭以上の経営体で平均437頭である。枝肉単価の平均は、市場出荷で1,990円/kg、相対取引で1,923円/kgとなっており、市場出荷と相対取引の価格差はほとんど見られない。

■交雑種の年間出荷頭数は、200頭以上の経営体で平均722頭である。枝肉単価の平均は、市場出荷で1,237円/kg、相対取引で1,231円/kgとなっている。黒毛和種と同様に、交雑種でも市場出荷と相対取引では、大きな価格差は生じていない。

- 乳用種の年間出荷頭数は、200 頭以上の経営体で平均 875 頭である。枝肉単価の平均は、市場出荷で 842 円/kg、相対取引で 794 円/kg となっている。
- 年間の副産物（きゅう肥）の状況は、200 頭以上の経営体で、平均年間販売数量が 2,814 トン、金額が 605 万円となっている。
- 市場出荷の実施は、200 頭以上の経営体で平均 4.8 割、相対取引の実施は、平均 5.0 割となっている。飼養規模の大きな経営体は、相対取引の実績が多い。相対取引の相手先は「法人」が 7 割であり、地域も「県内」が多い。

5 繁殖雌牛の種付状況

- 黒毛和種の主な種付方法は「人工授精」であり、受胎率は 73.5%となっている。
- 乳用種の主な種付方法は「人工授精」であり、受胎率は 59.7%となっている。交雑種の種付方法は「受精卵移植」であり、受胎率は 66.7%となっている。

6 飼料の給与状況

- 給与している飼料は、200 頭以上の経営体では「稲わら」、「成畜用配合飼料」、「大麦」、「とうもろこし」、「ふすま」等が上位となっている。
- 肥育牛の給与状況（1 日あたりの 1 頭への給与量）を見ると、肥育前期では 7.8kg、肥育中期では 10.1kg、仕上げ期では 9.7kg となっている。

7 敷料の使用状況

- 敷料については、「おが粉」が圧倒的に多く、200 頭以上の経営体の使用率は 87.3%となっている。ただし、近年は住宅着工件数の減少や輸入製材の増加等により、「おが粉」は入手しづらい状況にあり、今後は、「バーク」や「建築廃材」「綿くず」など、他の敷料を使用するケースも考えられる。

8 取り組んでいる経営努力

- 200 頭以上の経営体が現在行なっている経営努力は、「低価格な飼料調達に努めている（62.9%）」「機械化を積極的に進めている（44.6%）」「もと畜を低コストで導入する（42.1%）」「低価格の敷料調達に努めている（40.1%）」等が多い。
- 今後 3 年間の経営展開について、200 頭以上の経営体では「増頭」が 33.2%、「現状維持」が 59.8%

であり、「減少」「生産しない」が7.0%となっている。

- 増頭する理由は、「出荷先があるため」がもっとも多く、50%以上を占めている。規模拡大への課題は、「子牛の導入価格・販売価格の動向（64.6%）」「資金繰り（61.5%）」「施設・機械の更新・拡大（53.8%）」「肥育牛の販売価格の動向（49.2%）」「土地面積の拡大（40.0%）」等である。
- 一方、経営規模を「現状維持」「減少する」理由は、「飼料・資材費価格の高騰」が圧倒的に多く、半数以上を占めている。その他としては、「もと畜の高騰」「後継者不足」等も理由としてあげられている。

【詳細版】

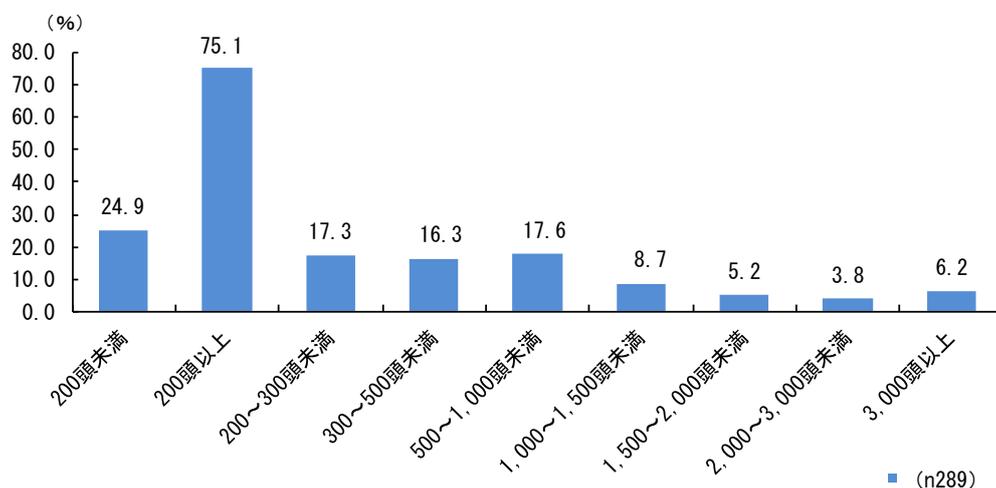
1 平成 26 年度の経営概況

(1) 飼養頭数

① 肥育牛飼養頭数規模別経営体数の分布

■平成 26 年度の肥育牛飼養頭数規模別の経営体数の分布は、「200 頭未満」が 24.9%、「200 頭以上」が 75.1%となった。内訳を見ると、「200～300 頭未満」17.3%、「300～500 頭未満」16.3%、「500～1,000 頭未満」17.6%、「1,000～1,500 頭未満」8.7%、「1,500～2,000 頭未満」5.2%、「2,000～3,000 頭未満」3.8%、「3,000 頭以上」6.2%であった（図 1）。

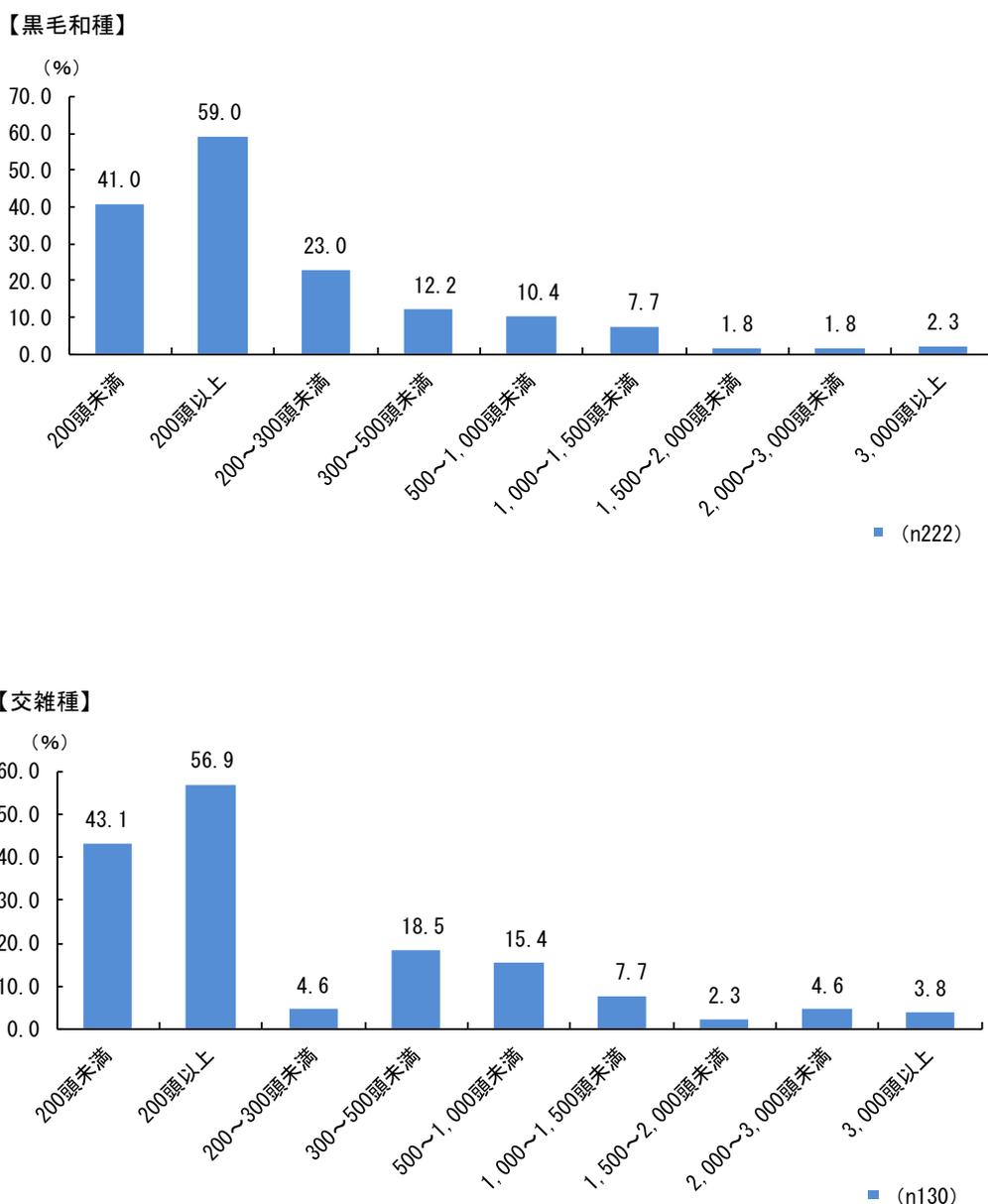
図 1 肥育牛飼養頭数規模別経営体数の分布



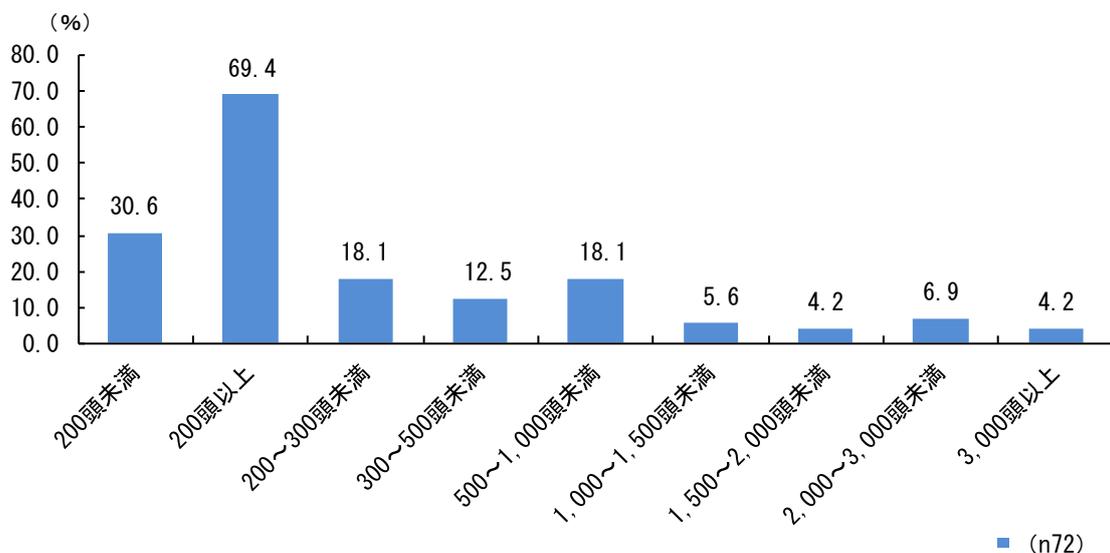
②品種別肥育牛飼養頭数規模別経営体数の割合

■品種別肥育牛飼養頭数規模別経営体数の割合をみると、黒毛和種は「200 頭未満」が 41.0%、「200 頭以上」が 59.0%、「交雑種」は「200 頭未満」が 43.1%、「200 頭以上」が 56.9%、乳用種は「200 頭未満」が 30.6%、「200 頭以上」が 69.4%であった（図 2）。

図 2 品種別肥育牛飼養頭数規模別経営体数の割合



【乳用種】



(2) 経営土地面積、畜産用地

■肥育牛飼養頭数規模別の1経営体当たりの経営土地面積は、200頭以上の経営体では44.9ha。畜産用地は200頭以上の経営体では38.0haであった。畜産用地、特に畜舎については、飼養頭数の規模に比例して用地の規模も拡大する(表1)。規模を拡大したいと考える経営体の中には、近隣に適切な土地が見つからず、困っている経営体も存在する。肉用牛経営の規模拡大にあたっては、用地の確保も課題の一つであると思われる。

表1 経営土地面積、畜産用地

【全体】		【(ha)】						
		経営土地	田	畑	牧草地	畜産用地	畜舎	その他
全体		44.9	7.4	9.0	28.5	29.5	1.1	28.3
肥育牛・飼養規模別	200頭未満・計	45.8	5.2	5.6	35.1	12.5	0.4	12.1
	200頭以上・計	44.9	8.4	10.5	25.9	38.0	1.4	36.5
	200～300頭未満	19.6	15.1	2.6	2.0	11.4	0.5	10.9
	300～500頭未満	34.7	6.1	6.9	21.7	51.5	0.9	50.6
	500～1,000頭未満	46.1	2.9	8.3	35.0	35.8	1.3	34.6
	1,000～1,500頭未満	76.5	4.6	23.6	48.2	47.8	1.8	45.9
	1,500～2,000頭未満	18.9	0.2	7.3	11.4	31.1	2.2	29.0
	2,000～3,000頭未満	68.9	10.4	26.9	31.6	19.2	3.8	15.4
	3,000頭以上	54.3	0.6	18.1	35.5	118.2	4.1	114.2

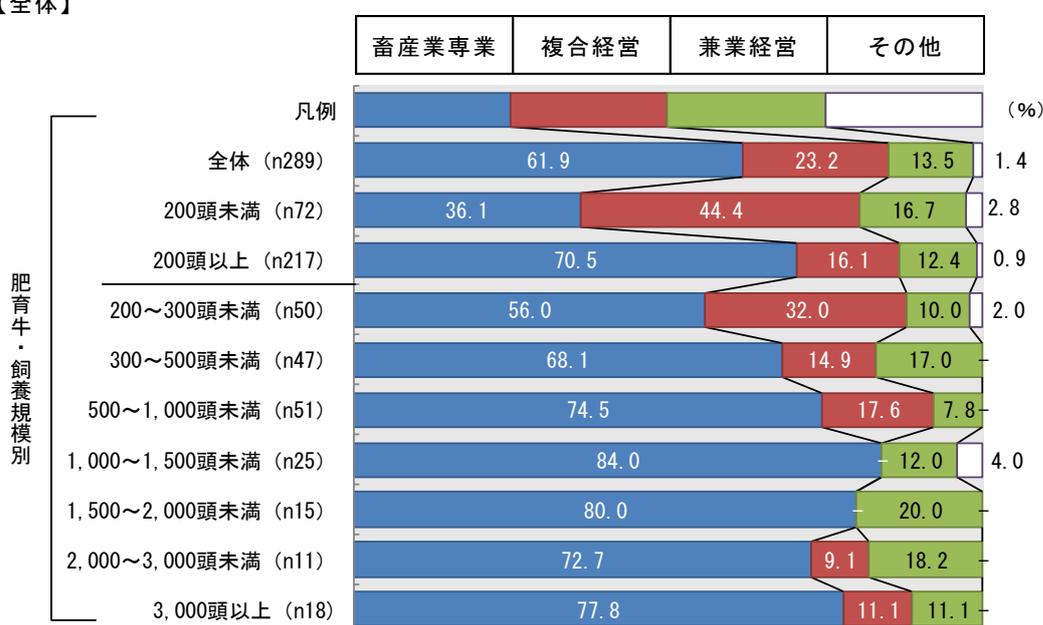
(3) 経営形態

①畜産専業・兼業の状況

■畜産専業・兼業の状況は、200 頭未満の経営体では「畜産業専業」が 36.1%、「複合経営」が 44.4%、「兼業経営」が 16.7%であった。200 頭以上の経営体では、「畜産業専業」が 70.5%、「複合経営」が 16.1%、「兼業経営」が 12.4%であった（図 3）。飼養規模が大きい経営体の方が、専業経営の割合が高くなっている。

図 3 畜産専業・兼業の状況

【全体】

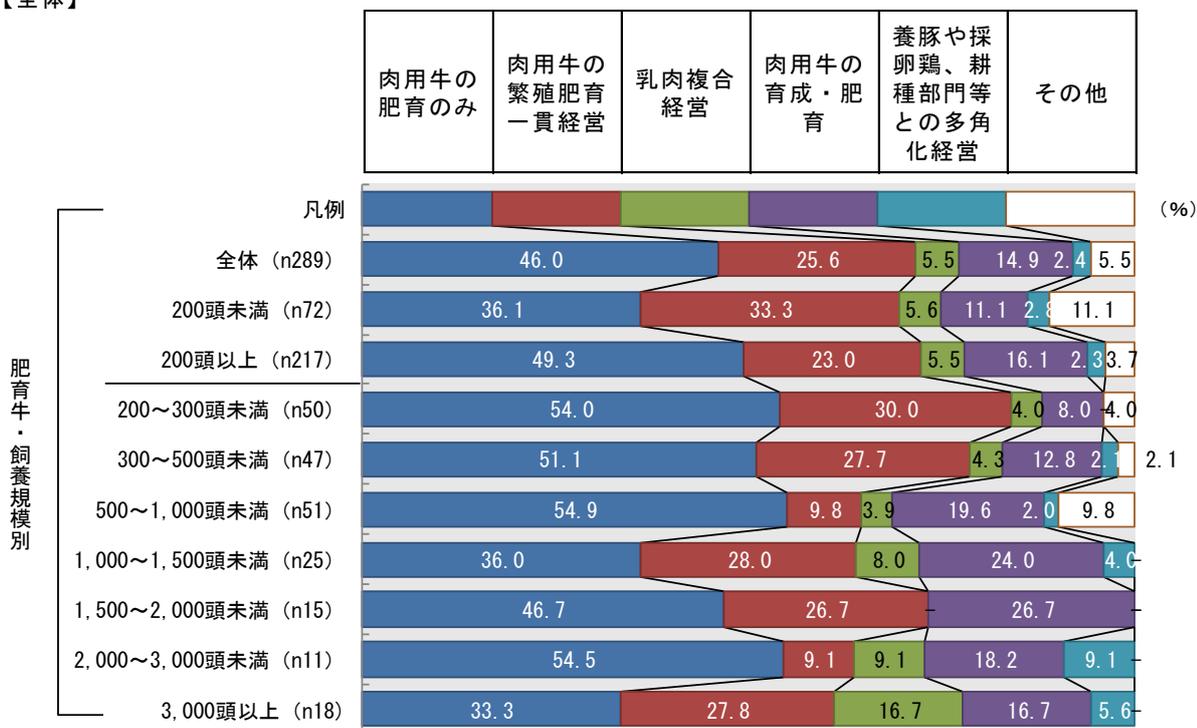


②肉用牛経営の形態

■肉用牛経営の形態は、200 頭未満の経営体では、「肥育専門経営」が 36.1%、「繁殖・肥育一貫経営」が 33.3%、「乳肉複合経営」が 5.6%、「育成・肥育」が 11.1%等となっている。200 頭以上の経営体では、「肥育専門経営」が 49.3%、「繁殖・肥育一貫経営」が 23.0%、「乳肉複合経営」が 5.5%、「育成・肥育」が 16.1%等となっている。200 頭以上の経営体の方が肥育専門経営の割合が高くなっている（図 4）。また、3,000 頭以上の経営体は、経営資源を活用してか、「肥育専門経営」「繁殖・肥育一貫経営」「乳肉複合経営」「育成・肥育」といった多様な形態をとっている。

図 4 経営形態

【全体】

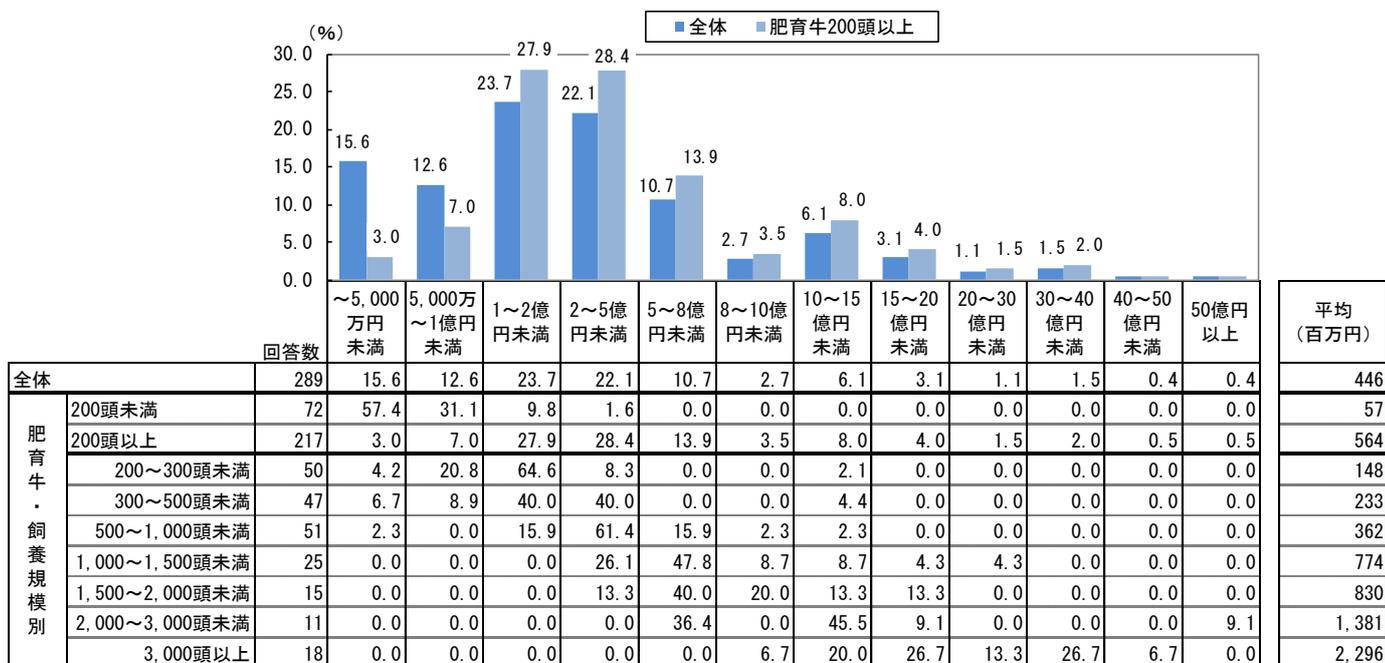


(4) 売上高

① 農業経営体全体

■ 農業経営体全体の売上高（平成 26 年度）は、200 頭未満の経営体は「～5,000 万円未満」（57.4%）が最も多く、平均 5,700 万円であった。200 頭以上の経営体は「1～2 億円未満」が 27.9%、「2～5 億円未満」（28.4%）が多く、平均 5 億 6,400 万円であった（図 5）。肥育牛飼養頭数規模に比例して、売上は多くなる傾向にある。2,000 頭以上の経営体は、10 億円を超える年商を計上しているところもある。

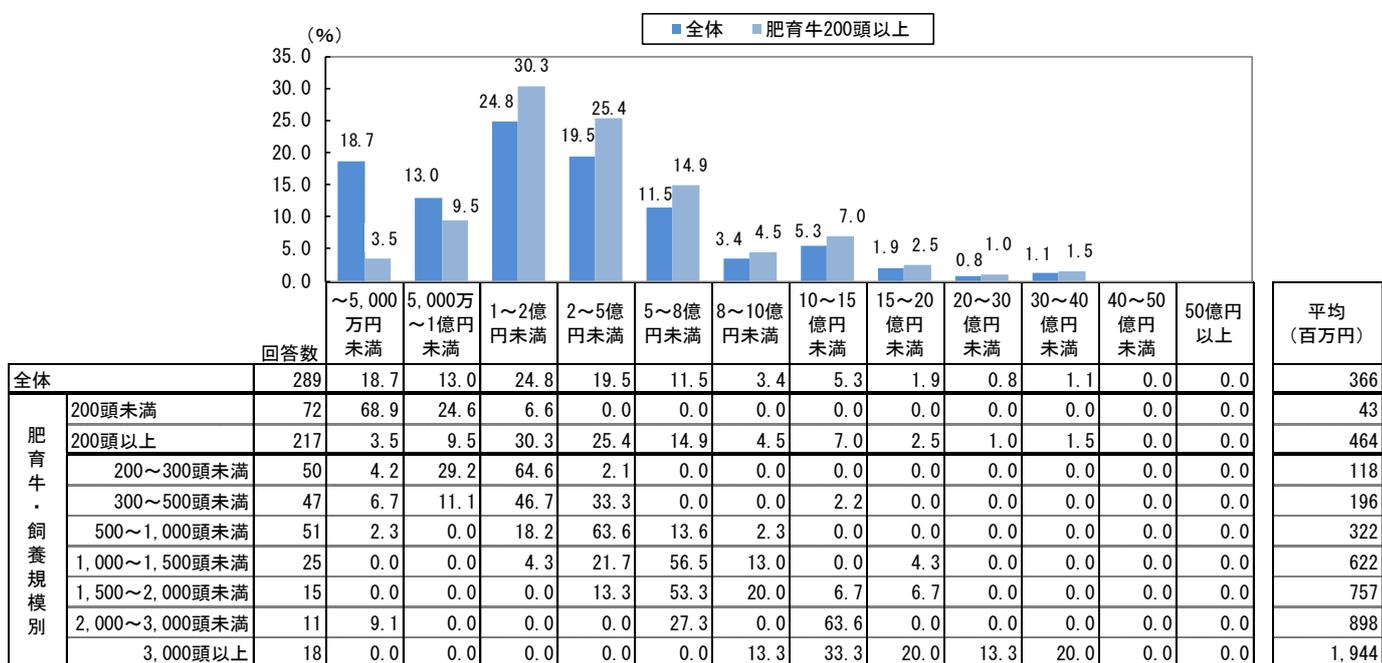
図 5 農業経営体全体の売上高



②肉用牛関連

■肉用牛関連の売上高は、200 頭未満の経営体は「～5,000 万円未満」(68.9%) が最も多く、平均 4,300 万円であった。200 頭以上の経営体は「1～2 億円未満」(30.3%) 「2～5 億円未満」(25.4%) が多く、平均 4 億 6,400 万円であった。農業経営全体と同様に、肥育牛飼養頭数規模に比例して大きくなる傾向にある(図 6)。3,000 頭以上の経営体は、年商 20 億円に迫るところもある。

図 6 肉用牛関連の売上高

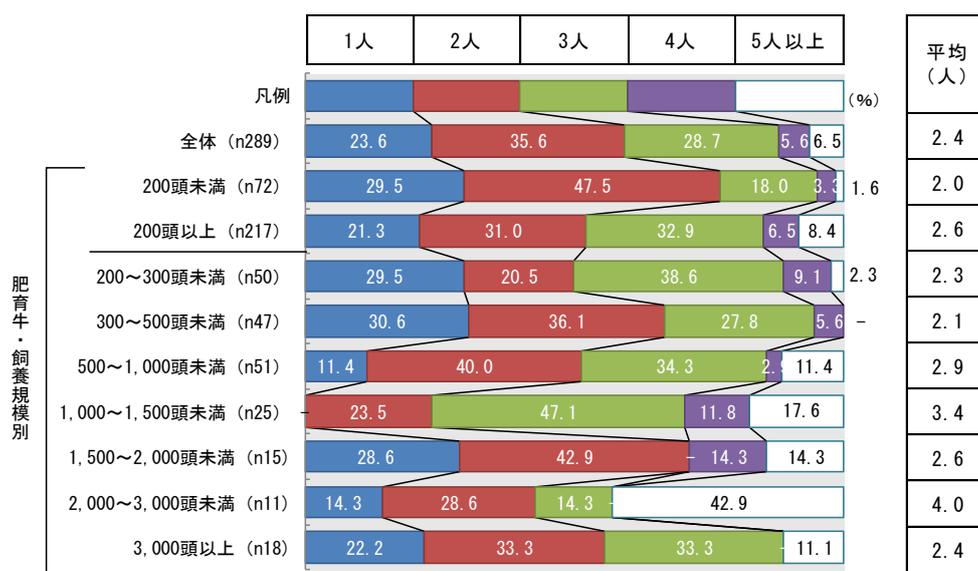


(5) 労働力

① 家族労働力

■ 肥育牛飼養頭数規模別では、200 頭未満の経営体は平均 2.0 人、200 頭以上の経営体は平均 2.6 人であった (図 7)

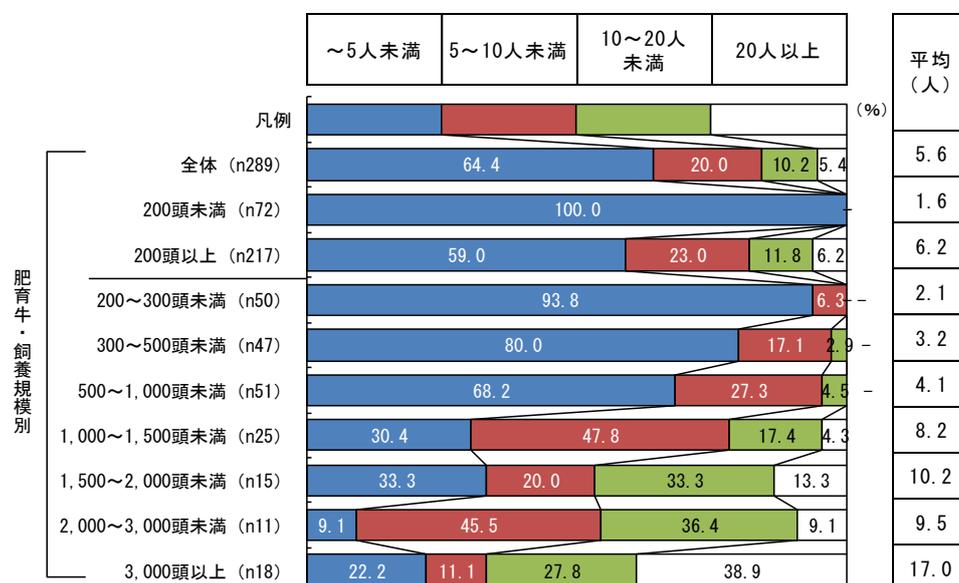
図 7 肉用牛関連・家族労働力



② 正社員 (常時雇用者)

■ 肉用牛関連に従事する正社員は、200 頭未満の経営体は平均 1.6 人、200 頭以上の経営体は平均 6.2 人であった (図 8)。1,500 頭以上の経営体では、正社員 10 人前後を雇用するケースもある。

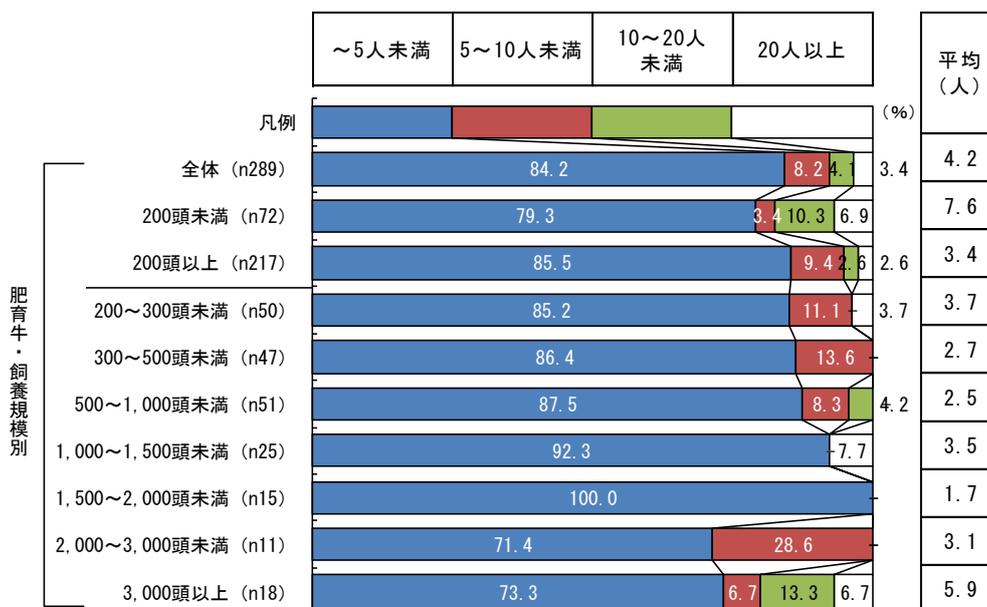
図 8 肉牛関連・正社員



③非正社員（臨時雇用者）

■肉用牛関連の非正社員は、200 未満の経営体は平均 7.6 人、200 頭以上の経営体は平均 3.4 人であった（図 9）。

図 9 肉牛関連・非正社員



④肉用牛関連作業における家族の1日当たりの労働時間

■肉用牛関連作業における家族の1日当たりの平均労働時間は、全体で「7.4 時間」となっている。肥育牛飼養頭数規模別では、200 頭未満の経営体では「6.3 時間」、200 頭以上の経営体では「7.6 時間」であった（表 2）。規模の大きい経営体の方が労働時間はやや長いと推測される。

表 2 肉用牛関連作業における家族の労働時間
(時間/日)

		肉用牛関連の 1日・1人当たりの 労働時間
全体		7.4
肥育牛・ 飼養 規模別	200頭未満	6.3
	200頭以上	7.6
	200~300頭未満	7.2
	300~500頭未満	7.4
	500~1,000頭未満	7.8
	1,000~1,500頭未満	8.1
	1,500~2,000頭未満	7.4
	2,000~3,000頭未満	7.9
3,000頭以上		8.0

2 生産費（肥育牛1頭当たり）

■品種別に見ると、肥育牛200頭以上の経営体では、黒毛和種954,286円、交雑種691,664円、乳用種470,904円となっている（表3～5）。

■サンプル調査ということから、必ずしも生産費構造のモデルを示しているものではないものの、品種別飼養頭数規模別の肥育牛1頭当たりの生産費は、飼養規模の大きい経営体の方がおおむね低くなる傾向がうかがえる。

■生産費の中でもっとも占有率が高いのは、「もと畜費」であり、200頭以上では黒毛和種が52.3%、交雑種が39.2%、乳用種では27.9%を占めている。近年、生産頭数の減少によって、肉用牛向けの子牛不足が話題となっているが、本調査においても、もと畜費の高騰が生産費上昇へ影響を与えているものと思われる。

表3 黒毛和種の生産費

	n数	もと畜費 (円)	購入飼料費 (円)	牧草・放牧・採草費 (円)	敷料費 (円)	光熱水道力費 (円)	消耗諸材料費 (円)	獣医師料及び医薬品費 (円)	賃借料及び料金 (円)	物件税及び公課諸負担 (円)	建物費 (円)	自動車費、農機具費 (円)	生産管理費 (円)	労働費 (円)	支払利子 (円)	支払地代 (円)	副産物価額 (円)	生産費 (円)	
全体	222	493,978	280,967	25,064	13,779	17,486	2,960	14,105	10,572	8,943	25,678	10,302	6,419	41,120	13,401	5,642	10,521	959,896	
肥育牛・飼養規模別	200頭未満	91	467,553	290,204	27,921	16,960	19,490	3,375	15,207	15,351	15,459	33,538	19,277	8,496	30,199	22,132	9,188	16,324	978,026
	200頭以上	131	499,341	278,709	24,253	13,025	17,031	2,816	13,852	9,421	7,443	23,687	8,370	5,951	43,384	11,642	4,667	9,307	954,286
	200～300頭未満	51	514,635	284,957	18,601	12,760	15,526	3,037	8,719	5,352	6,543	18,932	7,675	5,256	33,067	10,659	4,302	7,738	942,282
	300～500頭未満	27	516,206	283,505	26,434	14,347	11,614	2,964	18,820	10,741	7,517	17,880	9,197	4,293	53,269	12,949	8,004	14,193	983,549
	500～1,000頭未満	23	492,780	269,721	39,466	9,562	25,682	1,577	12,289	11,352	10,018	29,540	6,788	3,526	53,663	14,876	2,957	9,791	974,006
	1,000～1,500頭未満	17	459,041	268,384	32,093	19,200	23,681	3,538	21,371	8,264	8,555	44,452	8,668	9,618	48,926	12,666	4,564	9,927	963,096
	1,500～2,000頭未満	4	445,396	262,547	20,000	10,008	14,980	2,470	15,189	15,241	8,936	19,412	14,408	11,851	44,470	7,242	2,695	171	894,675
	2,000～3,000頭未満	4	459,401	291,792	6,396	14,783	19,145	3,355	14,197	17,271	3,500	28,958	8,277	3,736	36,362	8,077	4,038	12,171	907,116
3,000頭以上	5	503,270	264,776	24,413	5,080	4,678	2,866	18,910	14,159	2,588	8,956	9,426	6,542	22,409	4,427	4,316	4,561	892,254	

表4 交雑種の生産費

	n数	もと畜費 (円)	購入飼料費 (円)	牧草・放牧・採草費 (円)	敷料費 (円)	光熱水道力費 (円)	消耗諸材料費 (円)	獣医師料及び医薬品費 (円)	賃借料及び料金 (円)	物件税及び公課諸負担 (円)	建物費 (円)	自動車費、農機具費 (円)	生産管理費 (円)	労働費 (円)	支払利子 (円)	支払地代 (円)	副産物価額 (円)	生産費 (円)	
全体	130	266,868	281,426	24,589	12,853	12,871	6,083	10,756	7,053	7,734	21,287	7,547	5,140	30,110	6,538	5,333	9,499	696,689	
肥育牛・飼養規模別	200頭未満	56	248,672	282,714	22,083	21,476	14,913	7,833	13,727	7,818	11,000	27,750	8,563	8,917	36,050	4,091	4,364	9,866	710,106
	200頭以上	74	270,976	281,043	25,273	10,405	12,200	5,606	9,794	6,870	6,839	19,541	7,208	3,947	28,625	7,037	5,714	9,414	691,664
	200～300頭未満	6	290,000	315,400	26,500	4,333	21,500	3,000	4,000	6,000	7,500	13,667	28,000	2,500	48,000	2,000	8,000	8,290	772,110
	300～500頭未満	24	277,217	250,545	13,000	11,818	7,727	3,889	5,182	4,125	3,800	19,800	4,333	1,800	23,000	5,000	2,250	17,606	615,881
	500～1,000頭未満	20	240,000	287,000	42,875	11,286	10,125	3,889	10,000	11,400	2,571	12,750	3,857	9,750	29,818	5,125	1,000	1,541	679,905
	1,000～1,500頭未満	10	251,634	272,625	16,800	9,833	13,167	2,600	9,167	5,000	6,167	31,667	8,500	1,000	22,250	6,500	7,250	8,234	655,924
	1,500～2,000頭未満	3	260,510	295,500	7,000	23,500	7,000	2,000	10,000	1,000	5,000	22,000	8,000	1,000	42,000	24,000	1,000	1,442	708,067
	2,000～3,000頭未満	6	323,803	298,000	7,000	9,250	21,750	27,667	18,250	8,000	31,333	16,600	13,000	5,333	28,667	11,667	15,500	6,005	829,815
3,000頭以上	5	224,562	289,750	11,500	5,000	15,000	2,750	18,000	13,500	2,500	21,750	8,000	1,500	26,000	9,500	1,000	18,103	632,209	

表5 乳用種の生産費

	n数	もと畜費 (円)	購入飼料費 (円)	牧草・放牧・採草費 (円)	敷料費 (円)	光熱水道力費 (円)	消耗諸材料費 (円)	獣医師料及び医薬品費 (円)	賃借料及び料金 (円)	物件税及び公課諸負担 (円)	建物費 (円)	自動車費、農機具費 (円)	生産管理費 (円)	労働費 (円)	支払利子 (円)	支払地代 (円)	副産物価額 (円)	生産費 (円)	
全体	72	130,001	247,969	13,429	11,164	8,111	4,140	7,176	7,238	4,313	11,436	6,814	5,419	17,519	6,524	3,370	6,618	478,005	
肥育牛・飼養規模別	200頭未満	22	115,000	257,333	19,000	12,200	18,200	6,800	10,800	19,000	18,250	6,200	13,800	22,667	30,000	11,000	3,000	4,007	559,243
	200頭以上	50	131,444	247,000	13,150	11,071	7,241	3,885	6,783	6,650	3,045	11,960	5,895	3,571	16,520	6,053	3,385	6,749	470,904
	200～300頭未満	13	141,673	256,000	15,000	14,833	11,167	2,600	8,000	5,667	3,400	24,500	9,200	1,500	30,800	10,500	9,500	8,881	535,459
	300～500頭未満	9	121,979	253,000	13,000	10,833	5,714	2,429	3,600	9,500	5,667	10,714	3,333	1,000	13,250	3,667	1,333	21,283	437,737
	500～1,000頭未満	13	149,806	242,875	8,600	8,875	6,143	3,000	6,500	5,000	2,625	9,750	6,143	7,000	14,857	8,200	3,000	6,206	476,168
	1,000～1,500頭未満	4	104,500	248,500	10,000	32,000	4,500	3,000	12,500	15,000	2,000	9,000	1,000	2,000	11,000	7,000	2,000	6,078	457,922
	1,500～2,000頭未満	3	130,000	274,000	16,000	16,000	9,000	11,000	9,000	9,000	4,000	5,000	4,000	7,000	7,000	7,000	1,000	1,644	507,356
	2,000～3,000頭未満	5	122,872	235,000	21,333	6,000	7,667	9,333	10,000	5,000	1,000	8,500	1,000	7,000	13,667	2,000	1,000	1,343	450,029
3,000頭以上	3	110,969	231,000	12,000	6,333	6,333	4,000	4,333	3,500	1,667	8,500	7,000	2,500	10,667	1,000	5,000	1,056	413,745	

※生産費の合計には、副産物の価額は含まれていない。

3 もと畜の導入状況

(1) 年間もと畜導入状況

- もと畜の年間外部導入頭数は、「黒毛和種」が315頭、「交雑種（初生牛）」が462頭、「交雑種（子牛）」が429頭、「乳用種（初生牛）」が590頭、「乳用種（子牛）」が602頭である。
- 1頭当たりの導入価格は、「黒毛和種」が490,163円、「交雑種（初生牛）」が162,835円、「交雑種（子牛）」が263,080円、「乳用種（初生牛）」が46,440円、「乳用種（子牛）」が128,517円である。
- 導入時の1頭当たりの平均体重は、「黒毛和種」が272.0kg、「交雑種（初生牛）」が71.6kg、「交雑種（子牛）」が260.2kg、「乳用種（初生牛）」が58.7kg、「乳用種（子牛）」が238.3kgである（表6）。

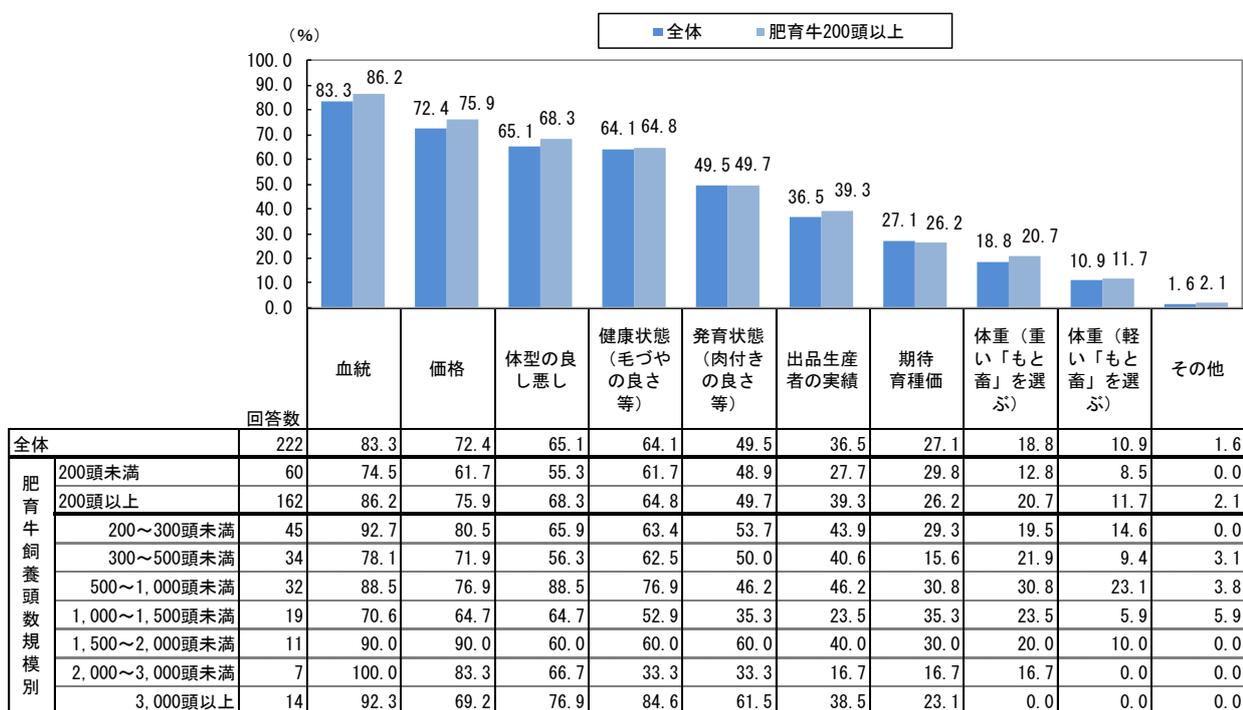
表6 もと畜の年間の導入状況

		もと畜の外部 導入頭数 (頭)	1頭あたりの 平均取得価格 (円)	1頭あたりの 平均生体重 (kg)	肥育開始時の 1頭あたりの 平均月齢 (ヶ月)	肥育開始時の 1頭あたりの 平均生体重 (kg)
黒毛和種		315	490,163	272.0	9.2	280.1
交雑種	初生牛	462	162,835	71.6	6.0	264.9
	子牛	429	263,080	260.2	8.0	270.0
乳用種	初生牛	590	46,440	58.7	5.7	329.3
	子牛	602	128,517	238.3	7.0	289.3

(2) もと畜を外部から導入する際の重視点

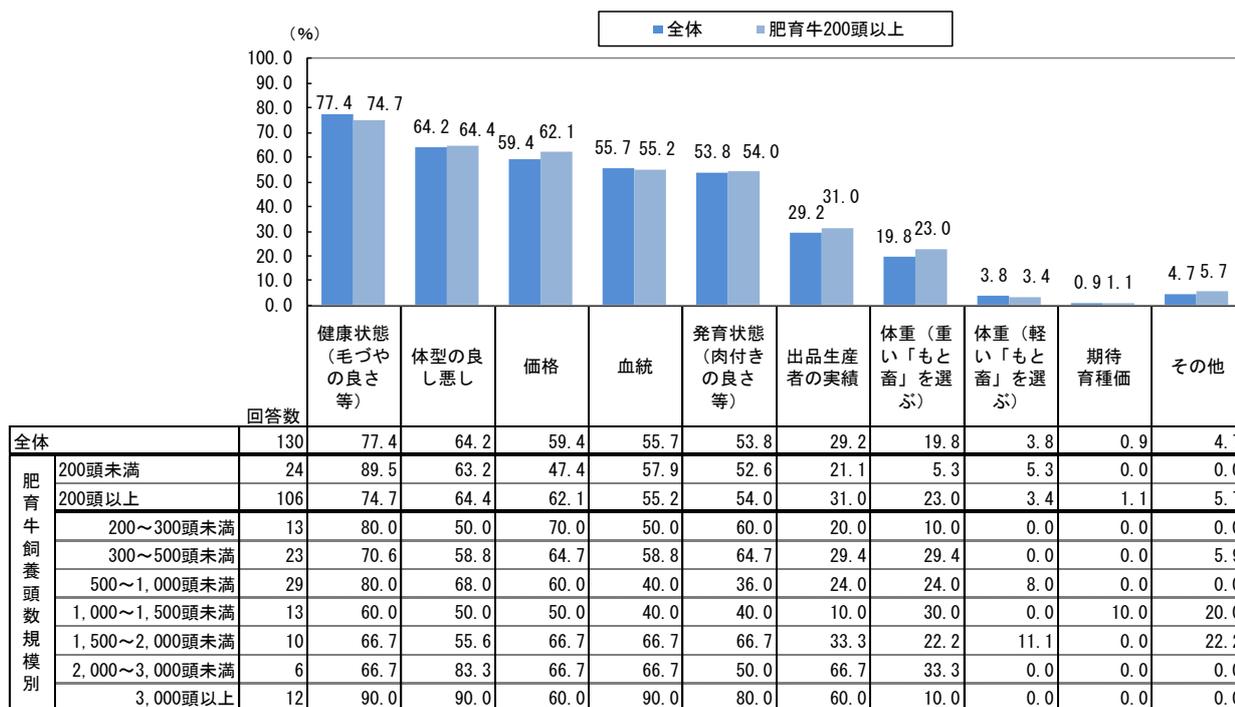
■もと畜（黒毛和種）を外部から導入する際の重視点については、肥育牛 200 頭以上の経営体では、「血統（86.2%）」「価格（75.9%）」「体型の良し悪し（68.3%）」「健康状態（64.8%）」「発育状態（49.7%）」が上位となる。「価格」よりも「血統」を重視する傾向が強い（図 10）。また、200 頭以上の経営体は、「血統」「価格」「体型の良し悪し」といった項目は、200 頭未満の経営体よりも重視する傾向がある。

図 10 もと畜（黒毛和種）を導入する際の重視点



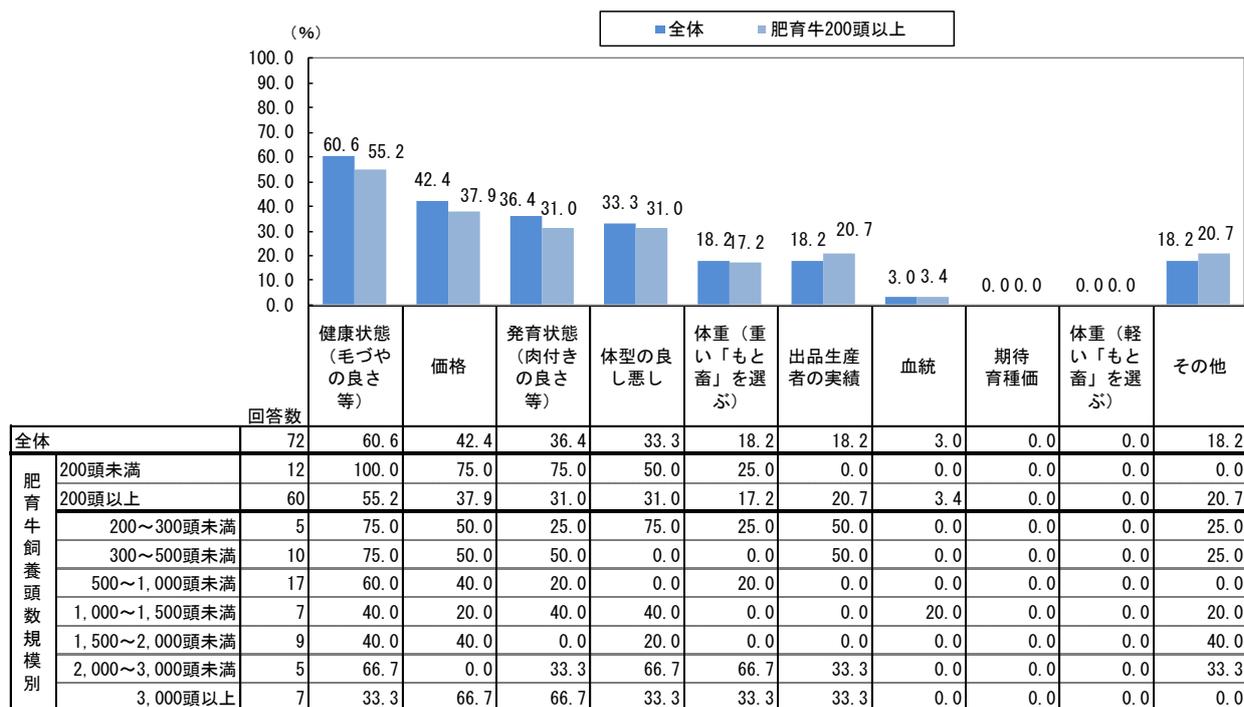
■もと畜（交雑種）を外部から導入する際の重視点については、肥育牛 200 頭以上の経営体では、「健康状態（74.7%）」「体型の良し悪し（64.4%）」「価格（62.1%）」「血統（55.2%）」「発育状態（54.0%）」が上位となる（図 11）。

図 11 もと畜（交雑種）を導入する際の重視点



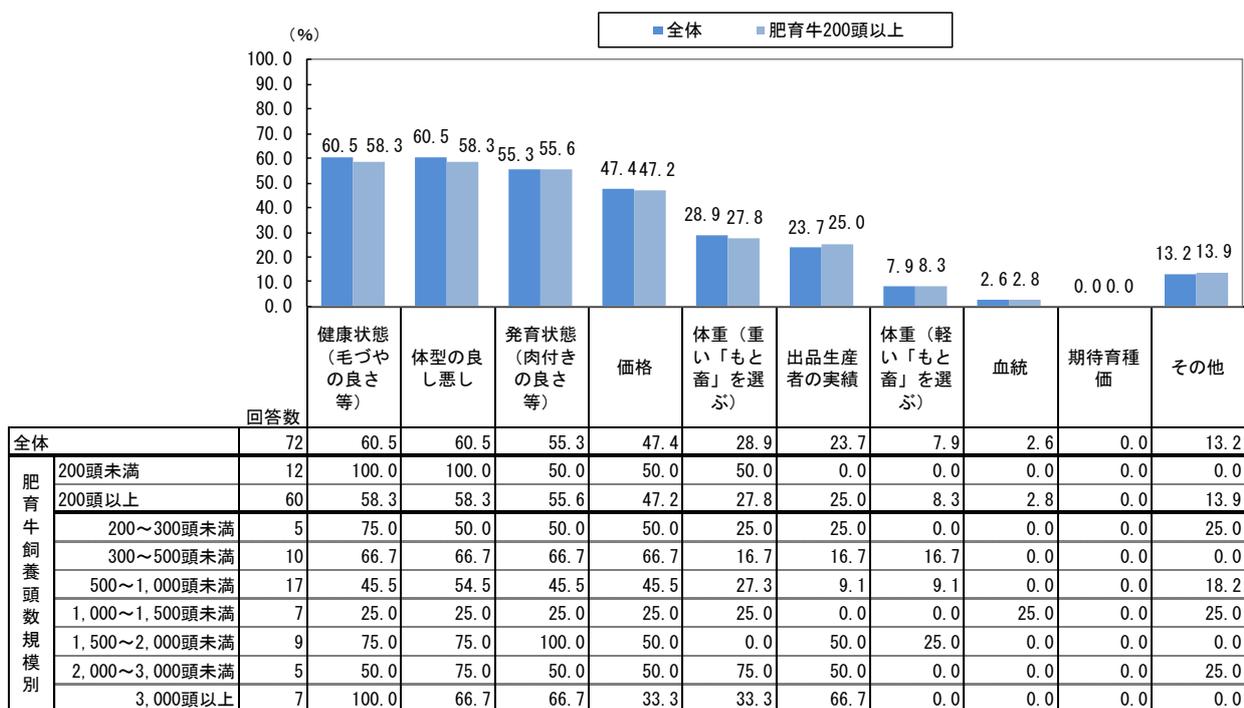
■もと畜（乳用種・初生牛）を外部から導入する際の重視点については、肥育牛200頭以上の経営体では、「健康状態（55.2%）」「価格（37.9%）」「発育状態（31.0%）」「体型の良し悪し（31.0%）」が上位となる（図12）。

図12 もと畜（乳用種・初生牛）を導入する際の重視点



■もと畜（乳用種・子牛）を外部から導入する際の重視点については、肥育牛200頭以上の経営体では、「健康状態（58.3%）」「体型の良し悪し（58.3%）」「発育状態（55.6%）」「価格（47.2%）」が上位となる（図13）。

図13 もと畜（乳用種・子牛）を導入する際の重視点



4 肥育牛の出荷状況

(1) 黒毛和種

■年間出荷頭数は、200 頭以上の経営体では、「黒毛和種」が437 頭である（表7）。

■平均販売価格は、200 頭以上の経営体では、市場出荷の枝肉単価 1,990 円/kg、相対取引の枝肉単価 1,923 円/kg となっている。相対取引の場合でも、市場の価格動向を見ているためか、市場出荷と相対取引の価格差はほとんど見られなかった。

表 7 出荷状況（黒毛和種）

	年間の 出荷頭数 (頭)	市場出荷 の枝肉の 平均単価 (円/kg)	相対取引 の枝肉の 平均単価 (円/kg)	出荷時の 1 頭あた りの平均 月齢 (ヶ月)	出荷時の 1 頭あた りの平均 生体重 (kg)	1 頭あた り平均肥 育日数 (日)	1 頭・1 日あた りの平均増 体重 (kg)	
全体	353	1,963	1,909	29.1	741.8	629.0	0.8	
肥育牛・ 飼養規 模別	200頭未満	35	1,866	1,844	28.8	741.4	634.1	0.9
	200頭以上	437	1,990	1,923	29.1	741.9	627.7	0.8
	200～300頭未満	124	1,999	1,740	28.4	745.9	625.3	0.8
	300～500頭未満	258	1,959	2,101	29.2	745.5	650.5	0.7
	500～1,000頭未満	341	2,019	2,121	29.4	728.8	605.3	1.0
	1,000～1,500頭未満	708	1,996	1,861	30.5	736.9	635.2	0.7
	1,500～2,000頭未満	995	2,071	2,084	29.5	718.0	615.7	0.7
	2,000～3,000頭未満	1,250	1,813	1,876	31.3	779.3	654.0	0.8
3,000頭以上	2,714	2,000	1,389	28.2	730.0	584.2	0.8	

(2) 交雑種

■年間出荷頭数は、200 頭以上の経営体では、「交雑種」が722 頭である。

■平均販売価格は、200 頭以上の経営体では、市場出荷の枝肉単価 1,237 円/kg、相対取引の枝肉単価 1,231 円/kg となっている。黒毛和種と同様に相対取引の場合でも、市場の価格動向を見ているためか、市場出荷と相対取引の価格差はほとんど見られなかった（表8）。

表 8 出荷状況（交雑種）

	年間の 出荷頭数 (頭)	市場出荷 の枝肉の 平均単価 (円/kg)	相対取引 の枝肉の 平均単価 (円/kg)	出荷時の 1 頭あた りの平均 月齢 (ヶ月)	出荷時の 1 頭あた りの平均 生体重 (kg)	1 頭あた り平均肥 育日数 (日)	1 頭・1 日あた りの平均増 体重 (kg)	
全体	554	1,233	1,235	25.8	775.3	615.7	0.9	
肥育牛・ 飼養規 模別	200頭未満	57	1,222	1,244	25.6	763.1	614.7	1.0
	200頭以上	722	1,237	1,231	25.9	780.1	616.0	0.9
	200～300頭未満	153	1,400	1,270	27.0	810.0	805.0	0.9
	300～500頭未満	238	1,206	1,232	25.4	762.1	604.5	0.9
	500～1,000頭未満	381	1,208	1,301	25.5	776.7	642.6	1.0
	1,000～1,500頭未満	838	1,232	1,207	26.0	771.9	583.1	0.9
	1,500～2,000頭未満	840	1,400	1,300	25.5	813.5	730.5	1.0
	2,000～3,000頭未満	1,479	1,342	1,114	25.3	778.5	519.4	0.9
3,000頭以上	2,723	1,162	1,225	28.0	824.1	575.0	1.0	

(3) 乳用種

■年間出荷頭数は、200 頭以上の経営体では、「乳用種」が 875 頭である。

■平均販売価格は、200 頭以上の経営体では、市場出荷の枝肉単価 842 円/kg、相対取引の枝肉単価 794 円/kg となっている（表 9）。

表 9 出荷状況（乳用種）

	年間の 出荷頭数 (頭)	市場出荷 の枝肉の 平均単価 (円/kg)	相対取引 の枝肉の 平均単価 (円/kg)	出荷時の 1 頭あた りの平均 月齢 (ヶ月)	出荷時の 1 頭あた りの平均 生体重 (kg)	1 頭あた り平均肥 育日数 (日)	1 頭・1 日あた りの平均増 体重 (kg)	
全体	758	834	800	20.0	761.6	434.4	1.2	
肥育牛・ 飼養規 模別	200頭未満	36	818	900	20.8	698.8	474.0	0.9
	200頭以上	875	842	794	19.9	772.4	428.8	1.2
	200～300頭未満	177	923	904	20.3	790.3	435.3	1.2
	300～500頭未満	305	750	865	21.0	776.3	458.4	1.1
	500～1,000頭未満	639	820	770	19.4	770.6	401.8	1.3
	1,000～1,500頭未満	1,053	-	751	16.6	682.5	503.0	1.3
	1,500～2,000頭未満	1,683	-	541	19.4	735.0	300.0	1.1
	2,000～3,000頭未満	1,912	750	800	20.5	790.0	411.7	1.1
3,000頭以上	3,090	900	821	19.6	800.7	447.3	1.2	

※若牛ブランドとして、月齢 14 ヶ月程度で出荷する経営体が含まれている。

(4) 年間の副産物の状況

■きゅう肥の販売数量は、200 頭以上の経営体では 2,814 トンとなっている。

■きゅう肥の売上は、200 頭以上の経営体では 605 万円となっている。経営体の中には、きゅう肥を積極的に販売し、事業の一つとして位置付けている所もある（表 10）。

表 10 副産物の状況

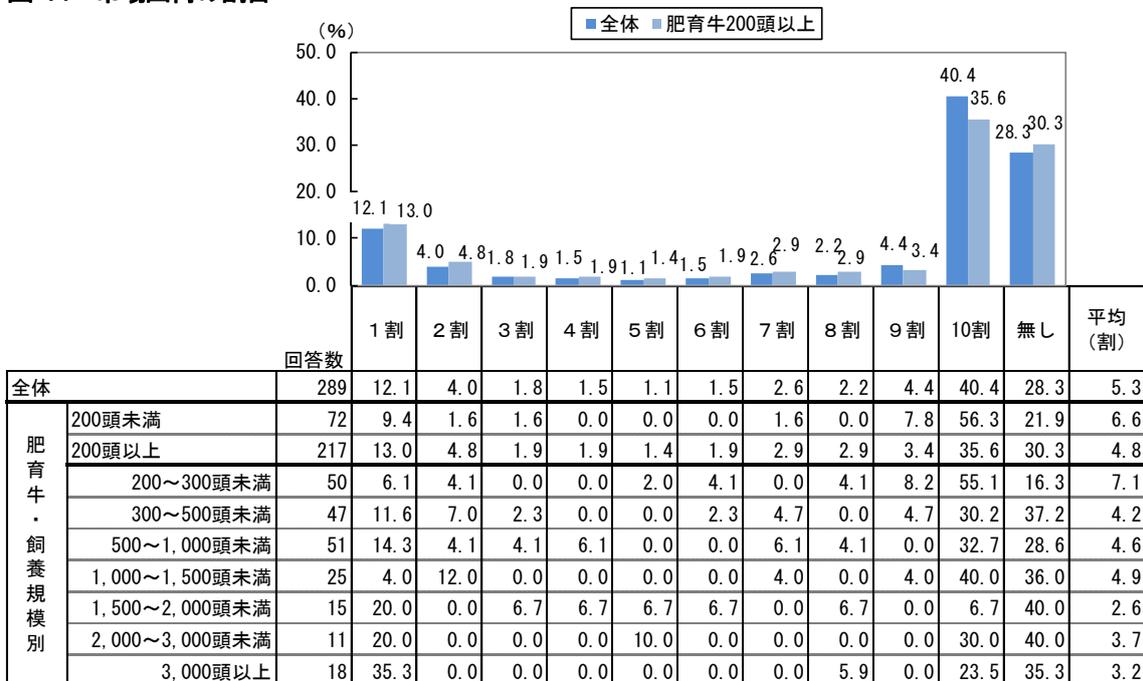
	副産物			
	きゅう肥の 販売数量 (トン)	きゅう肥の 売上 (万円)	その他 (万円)	
全体	2,574	553	116	
肥育牛・ 飼養規 模別	200頭未満	177	41	-
	200頭以上	2,814	605	116
	200～300頭未満	489	124	133
	300～500頭未満	819	256	84
	500～1,000頭未満	6,267	315	-
	1,000～1,500頭未満	2,632	1,070	-
	1,500～2,000頭未満	2,372	851	-
	2,000～3,000頭未満	3,574	742	-
3,000頭以上	5,617	2,115	-	

※その他は、稲わら販売、作業受託収入等

(5) 市場出荷、相対取引の状況

■市場出荷の実施は、200 頭未満の経営体の方が多く状況であり、平均で 6.6 割となっている(図 14)。

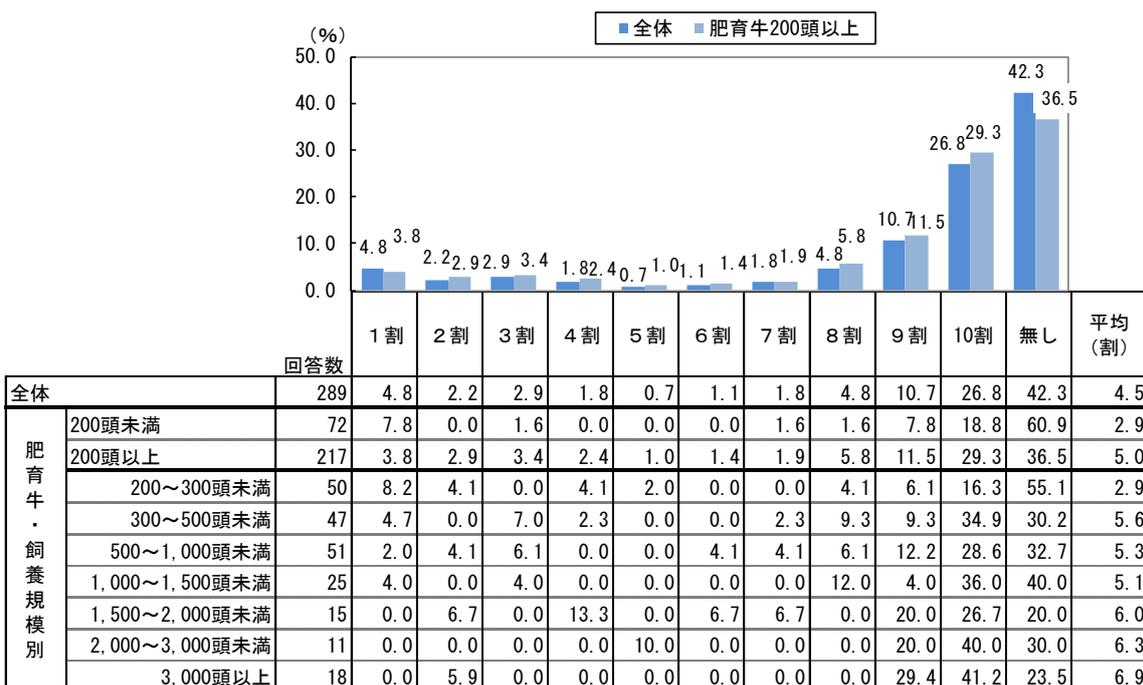
図 14 市場出荷の割合



■相対取引の実施は、200 頭以上の経営体で多く行なわれており、平均 5.0 割となっている(図 15)。

経営規模の拡大とともに、相対取引の実績も増加傾向にある。1,500 頭以上の経営体では、平均 6 割以上が相対取引である。

図 15 相対取引の割合



- 相対取引の取引先は、大半が「法人」(74.8%) で占められている (図16)。
- 相対取引の取引先の地域は、県内が多く、200 頭以上は「全て県内」(35.2%)、「県内が多い」(17.2%) となっている (図17)。

図 16 相対取引の取引先

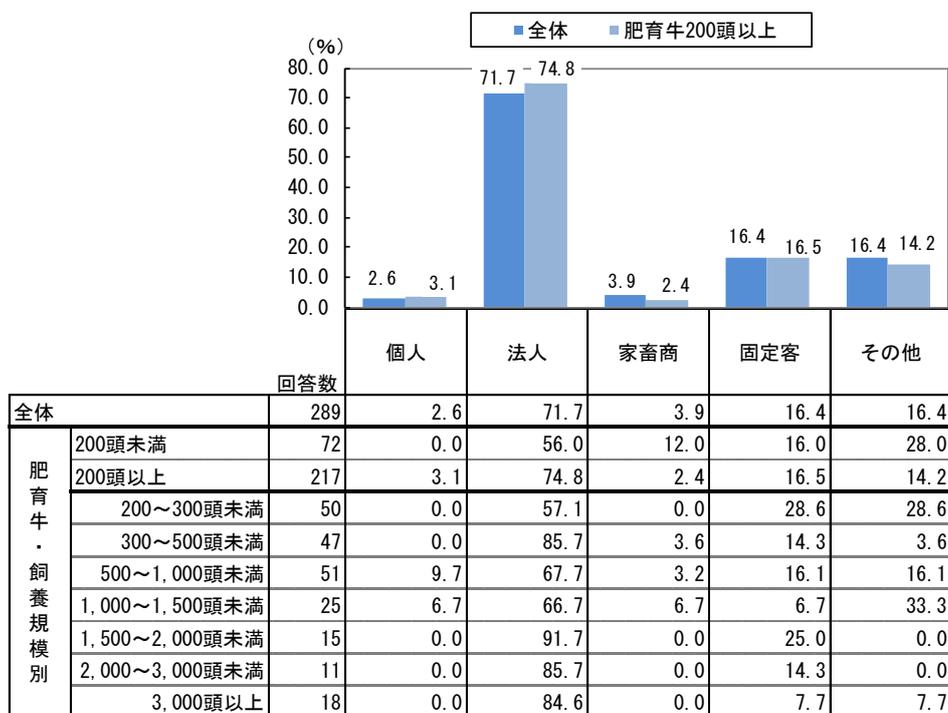
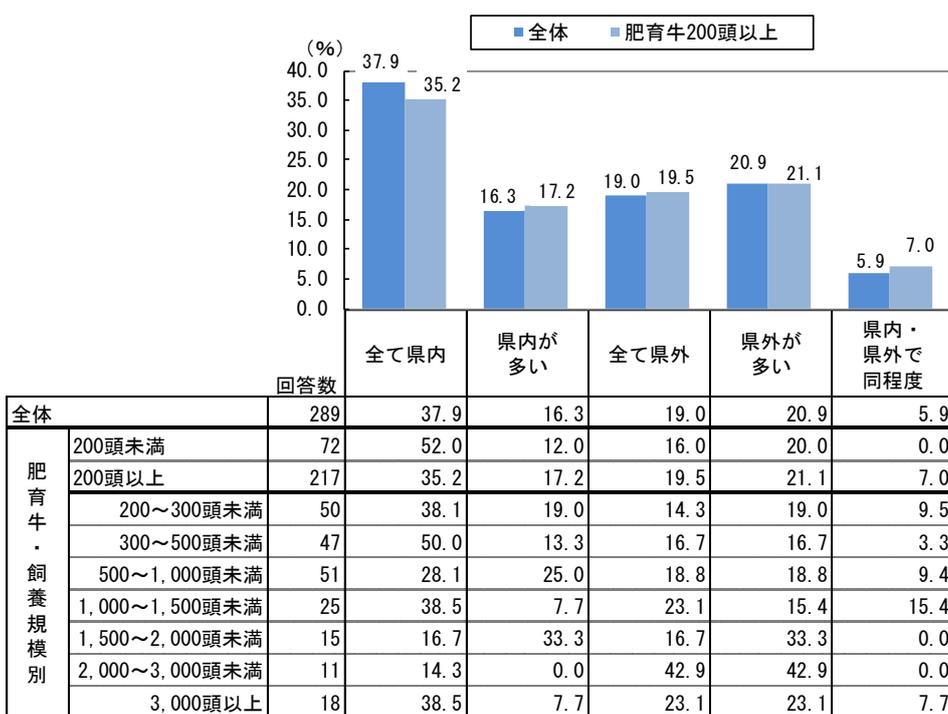


図 17 相対取引の取引先の地域



5 繁殖雌牛の種付状況

■黒毛和種の主な種付方法は「人工授精」であり、受胎率は73.5%となっている。

■乳用種の主な種付方法は「人工授精」であり、受胎率は59.7%となっている。交雑種の種付方法は「受精卵移植」であり、受胎率は66.7%となっている。(表14)。

表11 繁殖雌牛の種付状況

繁殖雌牛の種類	主な種付方法	(n)		受胎した頭数(頭)	受胎率(%)	精液、及び受精卵の外部購入割合(%)	1頭1回あたりの精液代・受精卵代(技術料を除く)(円)	1頭1回あたりの技術料(円)
		頭数	割合(%)					
①黒毛和種	1:人工授精	76	97.4	171.2	73.5	94.9	6,063	6,132
	2:受精卵移植	18	23.1	25.3	58.9	72.3	23,850	11,810
	3:自然交配	8	10.3	45.4	70.1	-	-	-
②乳用種	1:人工授精	8	88.9	265.3	59.7	91.7	3,240	3,750
	2:受精卵移植	4	44.4	53.0	47.3	83.3	33,300	8,417
	3:自然交配	2	22.2	23.0	100.0	-	-	-
③交雑種	1:人工授精	3	30.0	14.5	68.5	100.0	3,040	5,130
	2:受精卵移植	8	80.0	501.0	66.7	100.0	25,247	7,920
	3:自然交配	1	10.0	96.0	80.0	-	-	-

6 飼料の給与状況

■給与している飼料の種類について見ると、200 頭以上の経営体では「稲わら (70.9%)」「成畜用配合飼料 (69.5%)」「大麦 (45.8%)」「とうもろこし (45.8%)」「ふすま (44.8%)」の給与が多くなっている (図 18)。

■肥育牛の給与状況 (1 日あたりの 1 頭への給与量) を見ると、肥育前期では 7.8kg、肥育中期では 10.1kg、仕上げ期では 9.7kg となっている (表 15)。

図 18 飼料の給与状況

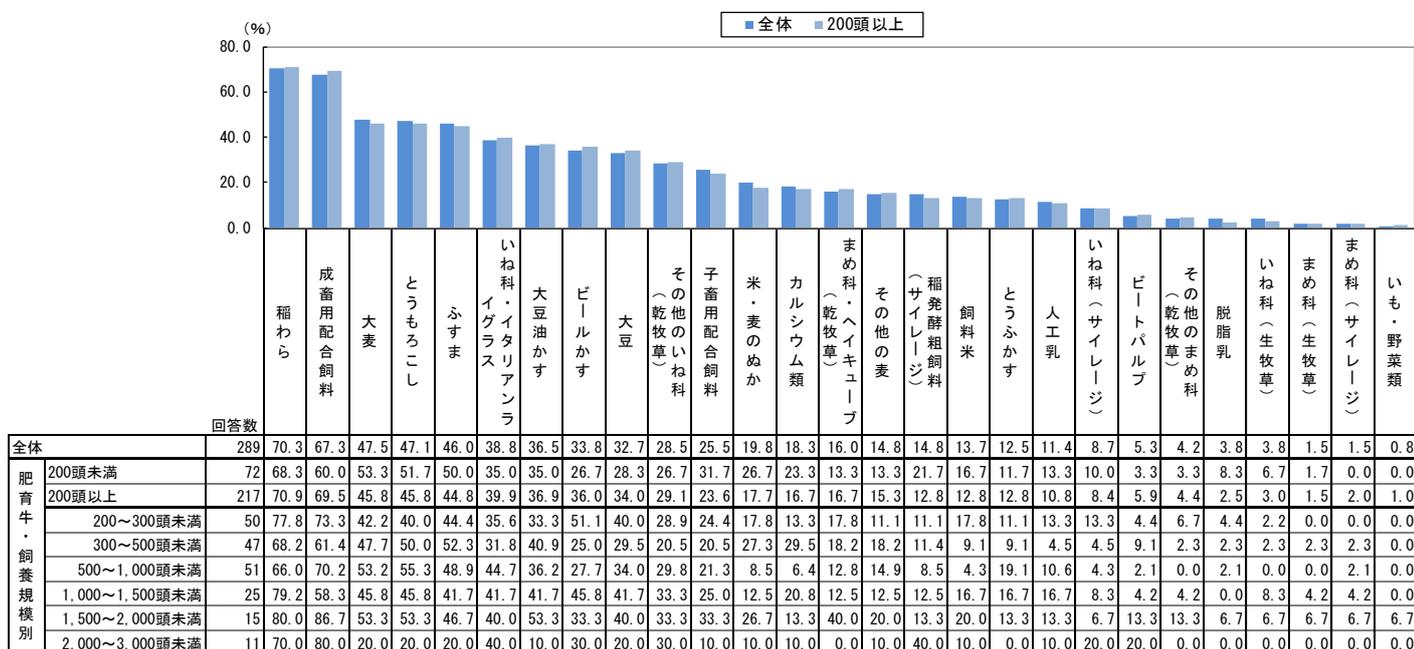


表 12 飼料の給与状況 (全体)

	1 日あたり、1 頭への飼料給与量 (kg)	飼料給与量のうち、購入飼料量 (kg)	購入飼料の 1 kgあたりの単価 (円)
(1) 肥育牛	① 肥育前期 (6~16ヶ月)	7.8	7.6
	② 肥育中期 (26~23ヶ月)	10.1	10.0
	③ 肥育仕上げ期 (23~30ヶ月)	9.7	9.5
(2) 繁殖雌牛	① 肥育段階 (8ヶ月齢)	4.7	4.3
	② 成牛段階 (14ヶ月齢)	5.1	3.5

表 13 飼料の給与状況 (品種別)

		1日あたり、 1頭への飼料給与量 (kg)	飼料給与量のうち、 購入飼料量 (kg)	購入飼料の 1kgあたりの単価 (円)
(3) 肥育牛・ 黒毛和種	① 肥育前期 (6～16ヶ月)	7.3	7.2	55.4
	② 肥育中期 (26～23ヶ月)	9.8	9.8	53.2
	③ 肥育仕上げ期 (23～30ヶ月)	9.6	9.3	53.3

		1日あたり、 1頭への飼料給与量 (kg)	飼料給与量のうち、 購入飼料量 (kg)	購入飼料の 1kgあたりの単価 (円)
(4) 肥育牛・ 交雑種	① 肥育前期 (6～16ヶ月)	8.5	8.2	52.2
	② 肥育中期 (26～23ヶ月)	10.3	10.2	50.3
	③ 肥育仕上げ期 (23～30ヶ月)	10.0	9.6	50.0

		1日あたり、 1頭への飼料給与量 (kg)	飼料給与量のうち、 購入飼料量 (kg)	購入飼料の 1kgあたりの単価 (円)
(5) 肥育牛・ 乳用種	① 肥育前期 (6～16ヶ月)	8.6	8.1	49.8
	② 肥育中期 (26～23ヶ月)	10.9	10.5	49.6
	③ 肥育仕上げ期 (23～30ヶ月)	10.1	9.7	50.0

7 敷料の使用状況

■敷料の使用状況は、「おが粉」の使用率が圧倒的に高く、200頭以上の経営体で87.3%の使用率となっている。ただし、近年の住宅着工件数の低迷、輸入製材の増加、バイオマス発電の使用等を理由に、「おが粉」は入手しづらい状況が想定される（図19）。今後は、他の敷料を使用するケースも考えられる。また、1日あたり、1頭の敷料は2.3～2.5kg程度となっている（表16）。

図19 敷料の使用状況（複数回答）

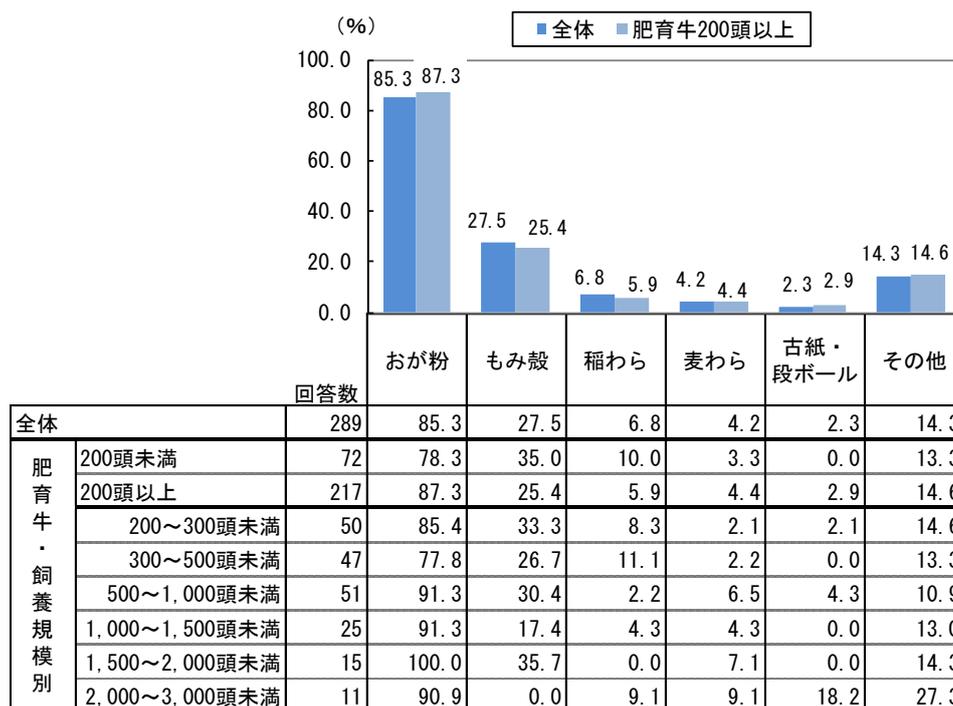


表14 敷料の量、単価

		1日あたり、1頭への敷料の量 (kg)	敷料の1トンあたりの単価 (円)
(1) 肥育牛	① 肥育前期 (6～16ヶ月)	2.3	11,664
	② 肥育中期 (26～23ヶ月)	2.3	11,450
	③ 肥育仕上げ期 (23～30ヶ月)	2.3	11,437
(2) 繁殖雌牛	① 肥育段階 (8ヶ月齢)	2.4	11,254
	② 成牛段階 (14ヶ月齢)	2.5	11,286

8 経営に関する取り組み

(1) 現在行なっている経営努力

■200頭以上の経営体が現在行なっている経営努力は、「低価格な飼料調達に努めている（62.9%）」「機械化を積極的に進めている（44.6%）」「もと畜を低コストで導入する（42.1%）」「低価格の敷料調達に努めている（40.1%）」等が多い。近年、急激な円安による飼料費の高騰や、もと畜費高騰への対応策が目立っている（図20）。また、機械化による効率化や自給飼料調達によるリスク回避等の動きも顕著である。

図20 現在行なっている経営努力（複数回答）

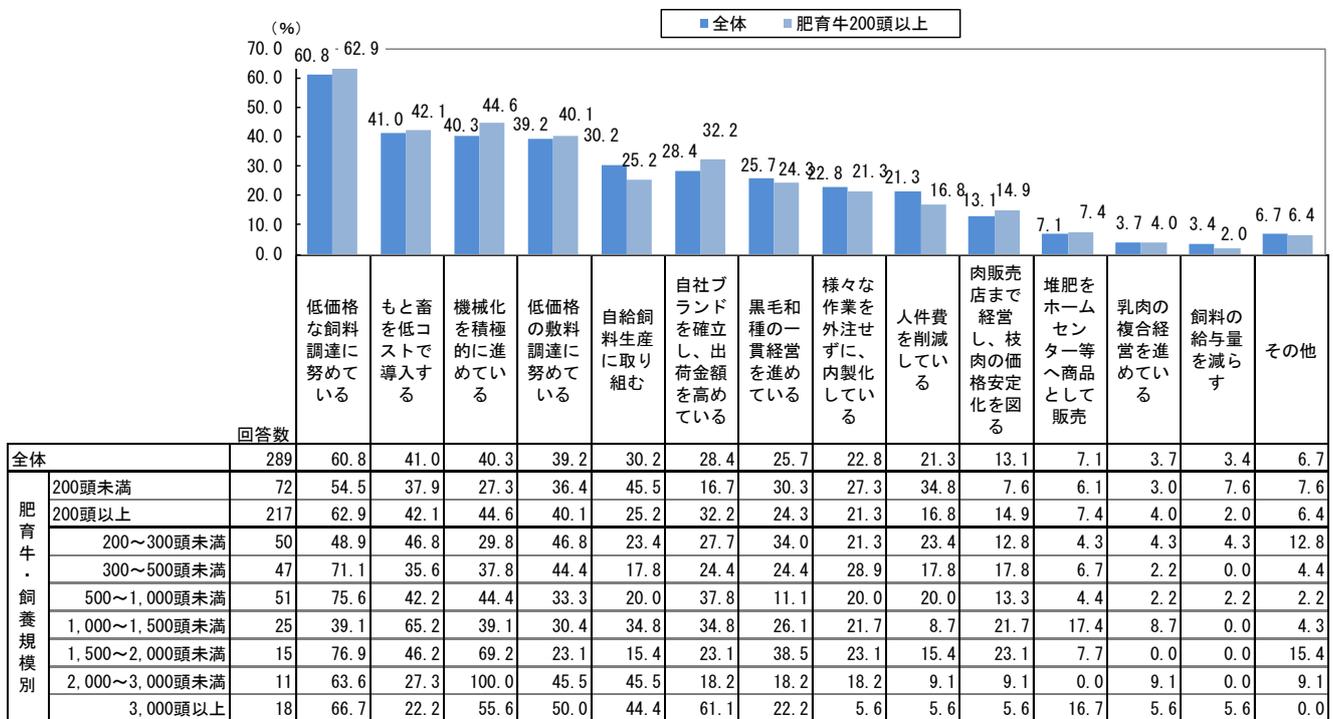


図 21 現在行なっている経営努力（黒毛和種、複数回答）

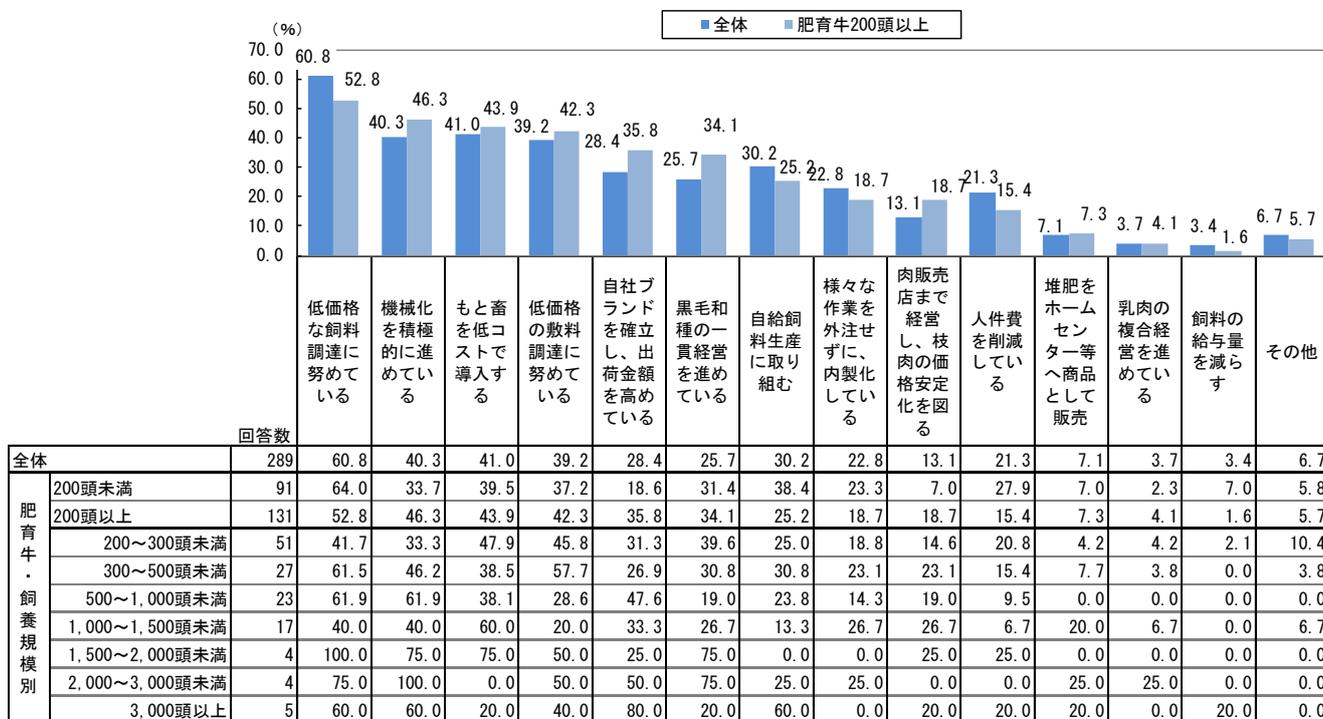


図 22 現在行なっている経営努力（交雑種、複数回答）

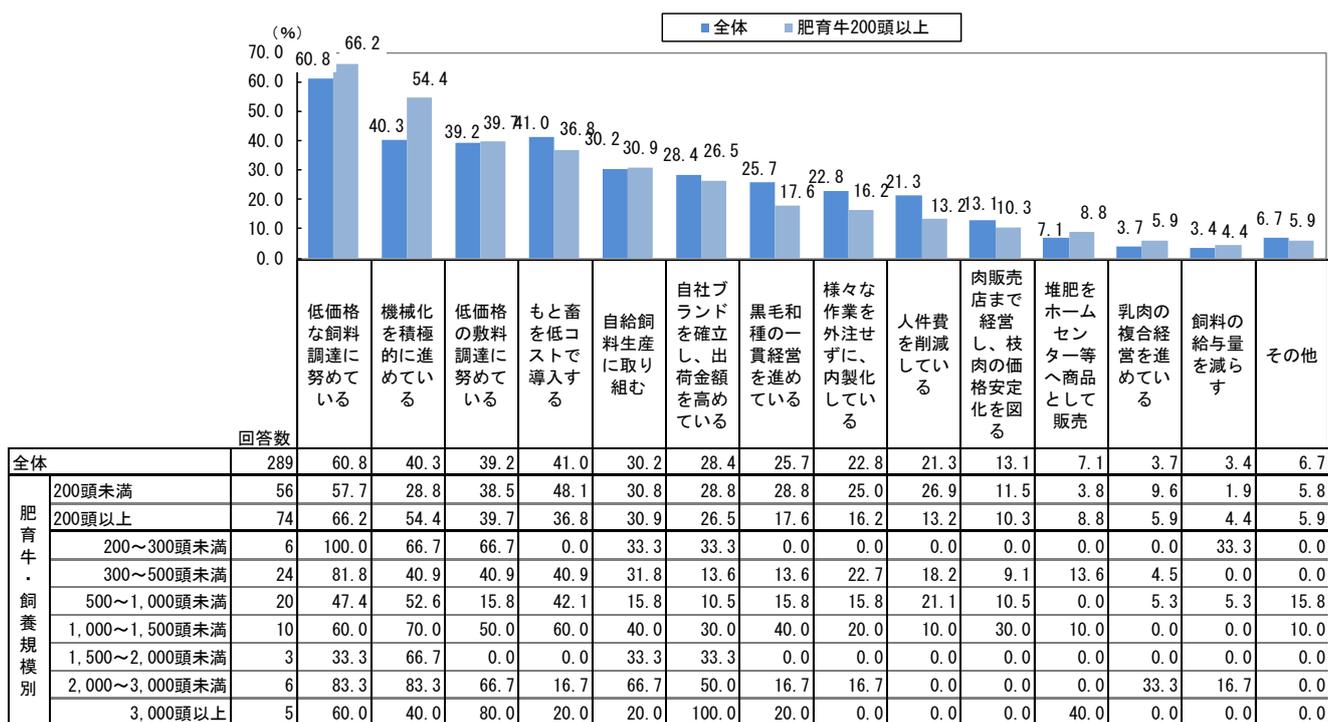
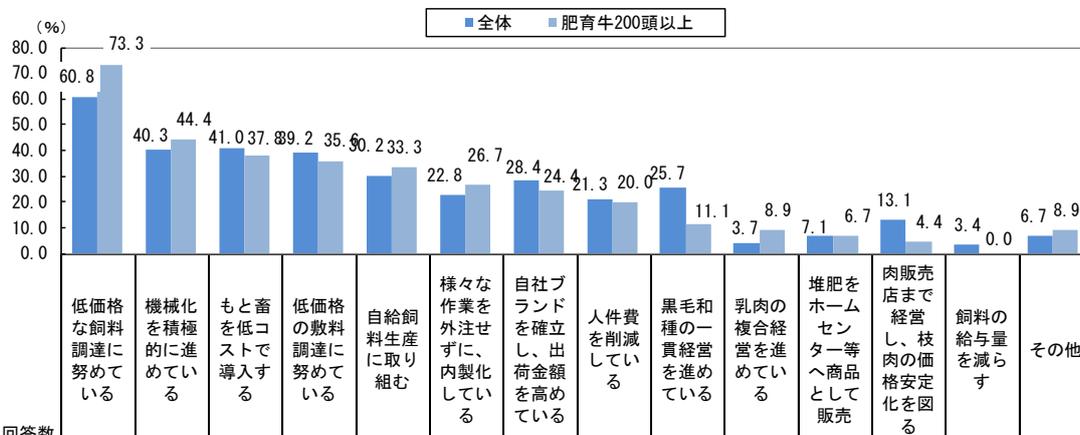


図 23 現在行なっている経営努力 (乳用種、複数回答)



		回答数	低価格な飼料調達に努めている	機械化を積極的に進めている	もと畜を低コストで導入する	低価格の敷料調達に努めている	自給飼料生産に取り組む	様々な作業を外注せずに、内製化している	自社ブランドを確立し、出荷金額を高めている	人件費を削減している	黒毛和種の一貫経営を進めている	乳肉の複合経営を進めている	堆肥をホームセンター等へ商品として販売	肉販売店まで経営し、枝肉の価格安定化を図る	飼料の給与量を減らす	その他
全体		289	60.8	40.3	41.0	39.2	30.2	22.8	28.4	21.3	25.7	3.7	7.1	13.1	3.4	6.7
肥育牛・飼養規模別	200頭未満	22	68.2	22.7	50.0	50.0	31.8	36.4	18.2	31.8	22.7	13.6	4.5	9.1	4.5	4.5
	200頭以上	50	73.3	44.4	37.8	35.6	33.3	26.7	24.4	20.0	11.1	8.9	6.7	4.4	0.0	8.9
	200～300頭未満	13	66.7	25.0	50.0	25.0	25.0	16.7	16.7	25.0	25.0	25.0	0.0	8.3	0.0	8.3
	300～500頭未満	9	87.5	37.5	37.5	37.5	25.0	37.5	37.5	25.0	12.5	12.5	12.5	0.0	0.0	12.5
	500～1,000頭未満	13	54.5	36.4	27.3	45.5	36.4	36.4	27.3	27.3	0.0	0.0	18.2	0.0	0.0	0.0
	1,000～1,500頭未満	4	100.0	75.0	25.0	50.0	50.0	25.0	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	25.0
	1,500～2,000頭未満	3	50.0	50.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	2,000～3,000頭未満	5	80.0	100.0	40.0	40.0	40.0	40.0	20.0	20.0	20.0	20.0	0.0	20.0	0.0	20.0
3,000頭以上	3	100.0	33.3	33.3	33.3	66.7	0.0	33.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	

(2) 今後3年間の経営展開の方向性

■今後3年間の経営展開については、「現状維持」が最も多く、200頭以上の経営体では、59.8%を占める。一方、「増頭」する経営体は33.2%を占めており、現状では、規模の大きな経営体が強い経営意欲を示している（図21）。特に、2,000頭以上の経営体は、1/3以上が「増頭」に意欲を見せている。

図 24 今後3年間の経営展開の方向性（全体）

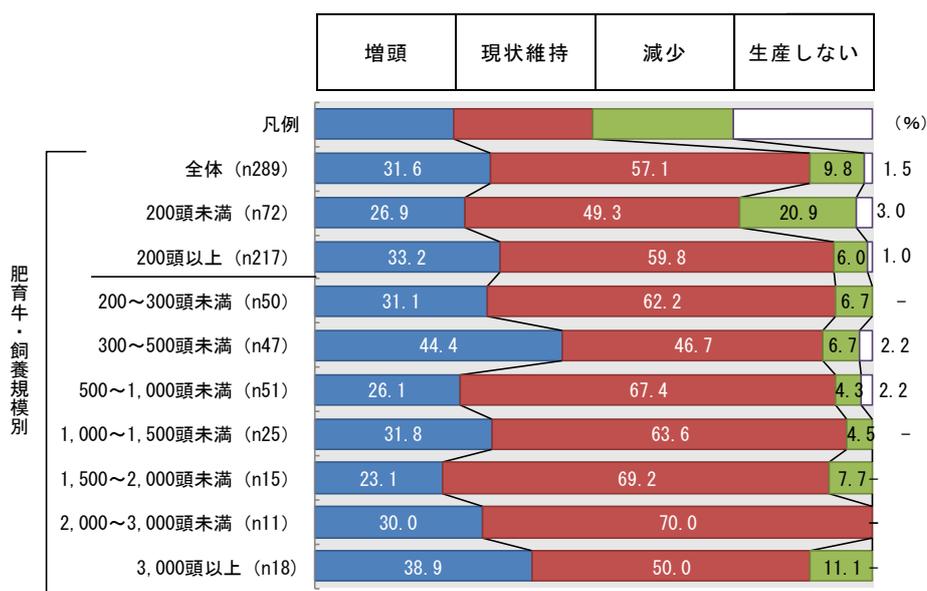


図 25 今後3年間の経営展開の方向性（黒毛和種）

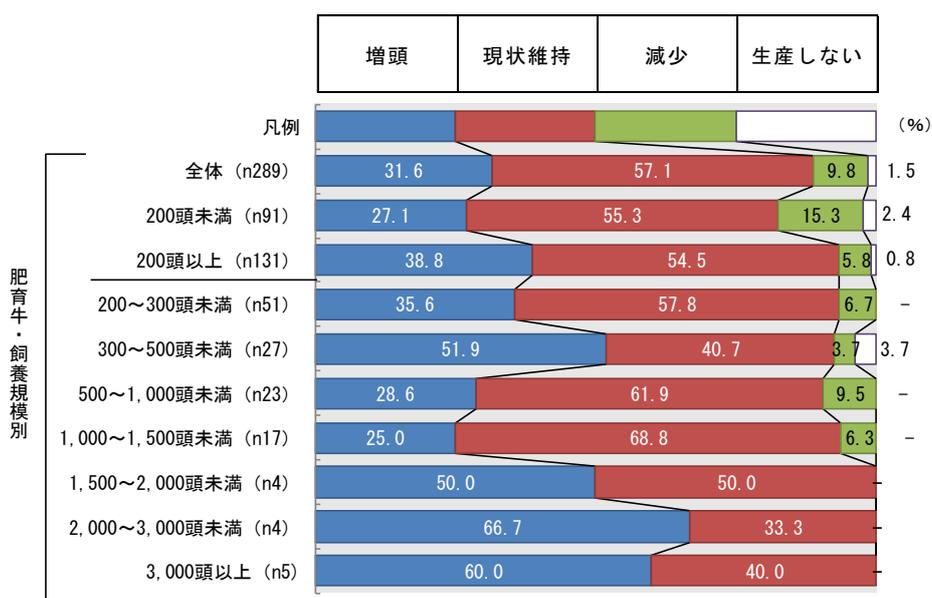


図 26 今後3年間の経営展開の方向性（交雑種）

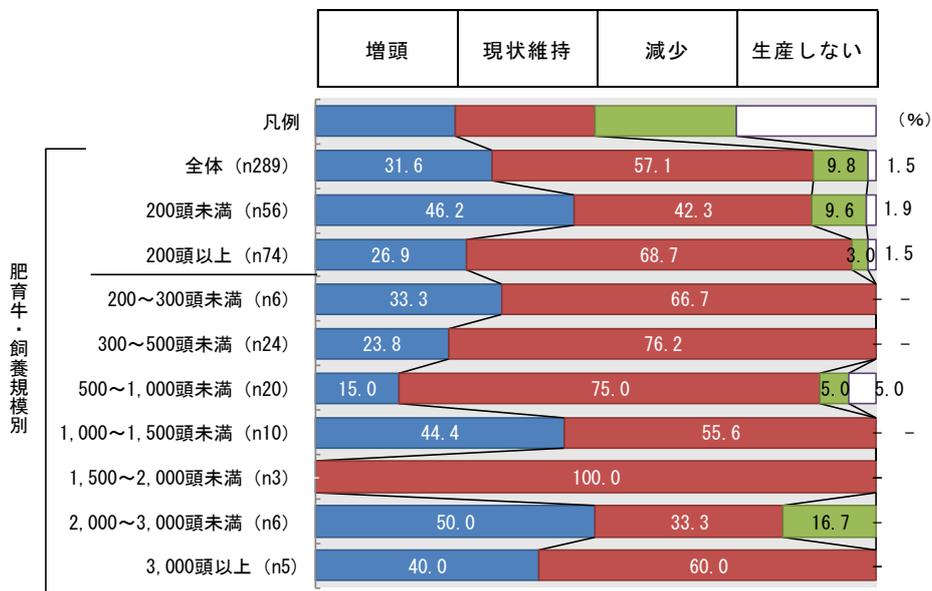
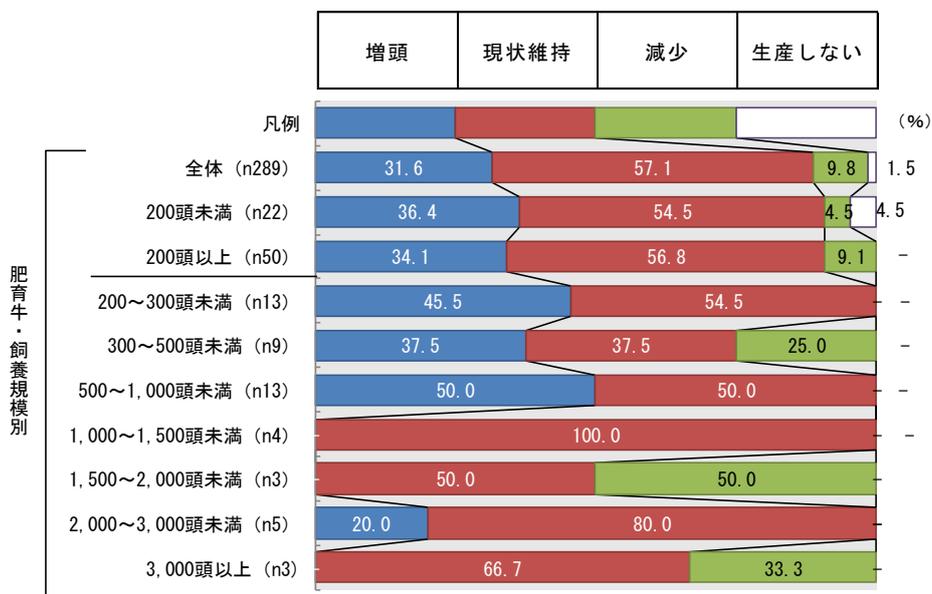


図 27 今後3年間の経営展開の方向性（乳用種）



■増頭する理由は、「出荷先があるため」がもっとも多く、50%以上を占めている。販路確保の如何が経営規模拡大に不可欠なこととして顕在化（図22）。その他、もと畜の入手が困難な状況を反映して、「後継牛を確保するため」といった理由も目立っている。

図 28 増頭の理由（全体）

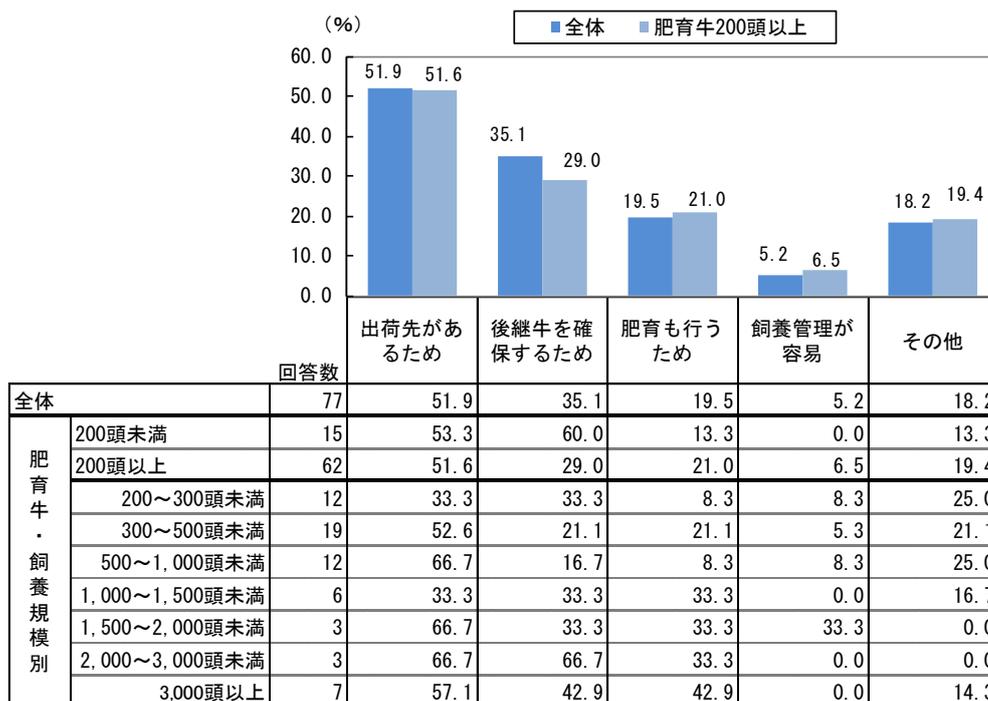
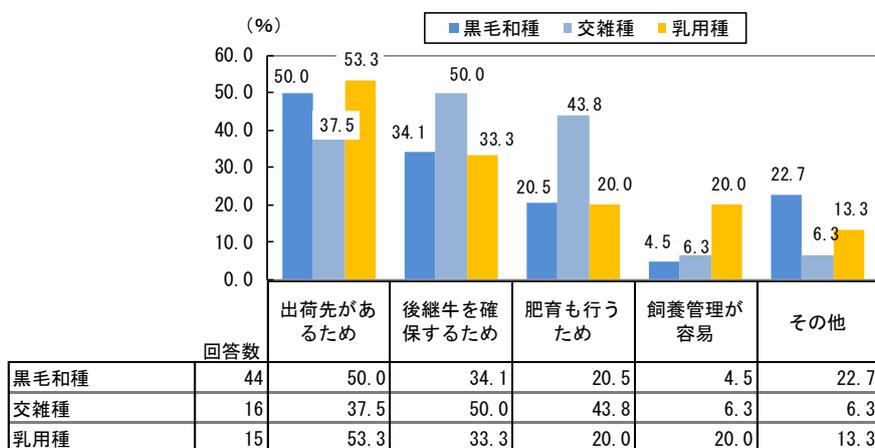


図 29 増頭の理由（品種別）



※200頭以上

■規模拡大を実現するためには、200 頭以上の経営体では、「子牛の導入価格・販売価格の動向 (64.6%)」「資金繰り (61.5%)」「施設・機械の更新・拡大 (53.8%)」「肥育牛の販売価格の動向 (49.2%)」「土地面積の拡大 (40.0%)」といった課題の克服が求められる (図 23)。

図 30 規模拡大を実現するための課題 (全体)

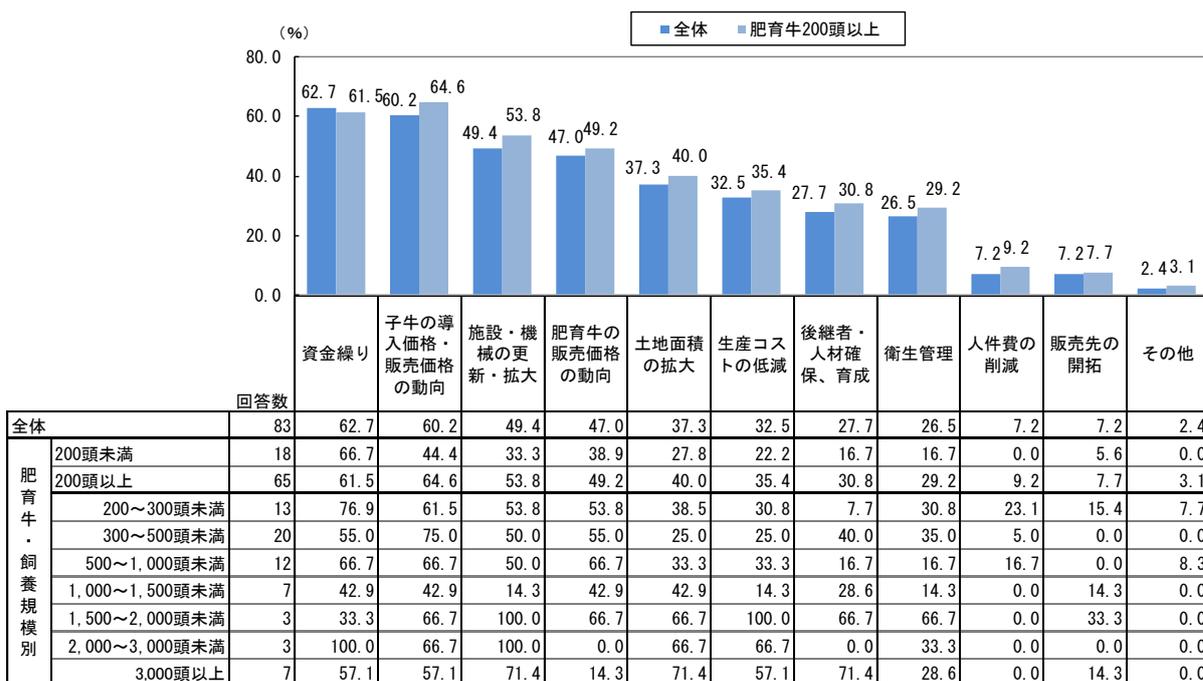
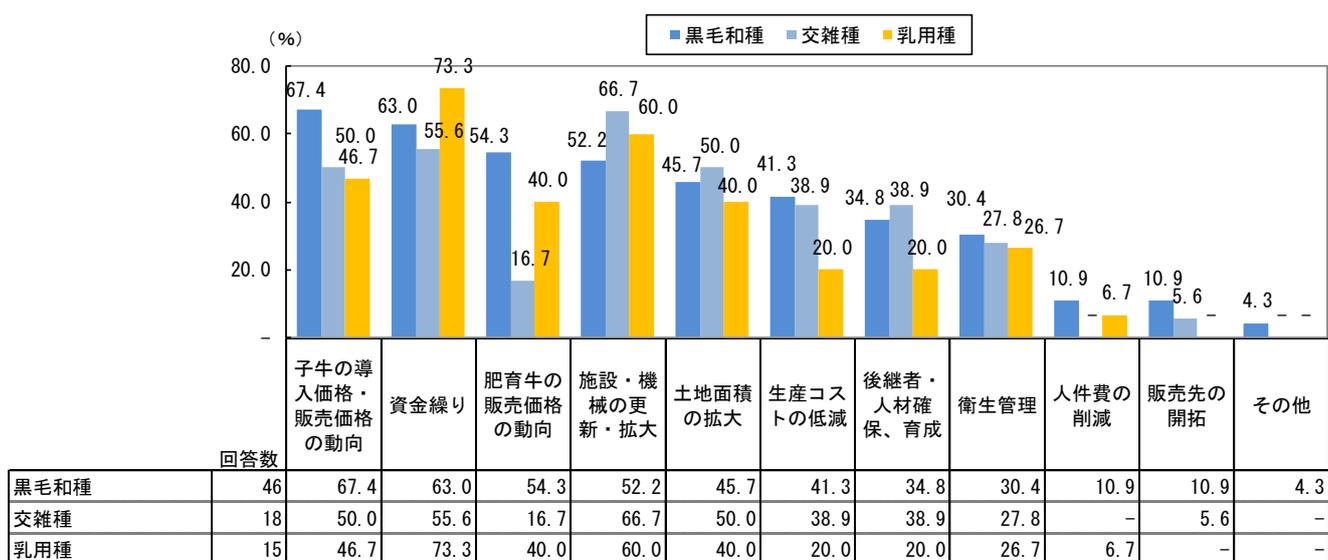


図 31 規模拡大を実現するための課題 (品種別)



※200頭以上

■今後3年間の経営規模について、200頭以上の経営体では、「現状維持(59.8%)」「減少する(6.0%)」(図21)との回答理由は、「飼料・資材費価格の高騰(57.1%)」が圧倒的に多い。次いで、「土地面積に問題がある(29.4%)」といった理由が多い(図24)。

■その他の自由回答としては、「もと畜の高騰」「後継者不足」「資金調達」等の回答理由が目立った。

図 32 現状維持、または減少する理由(全体)

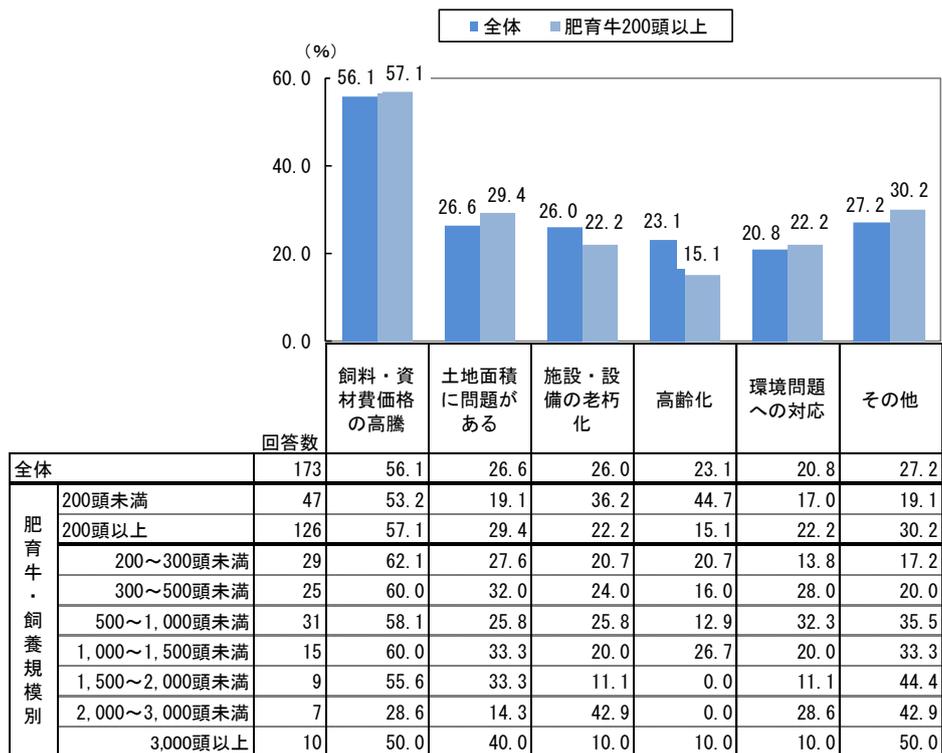
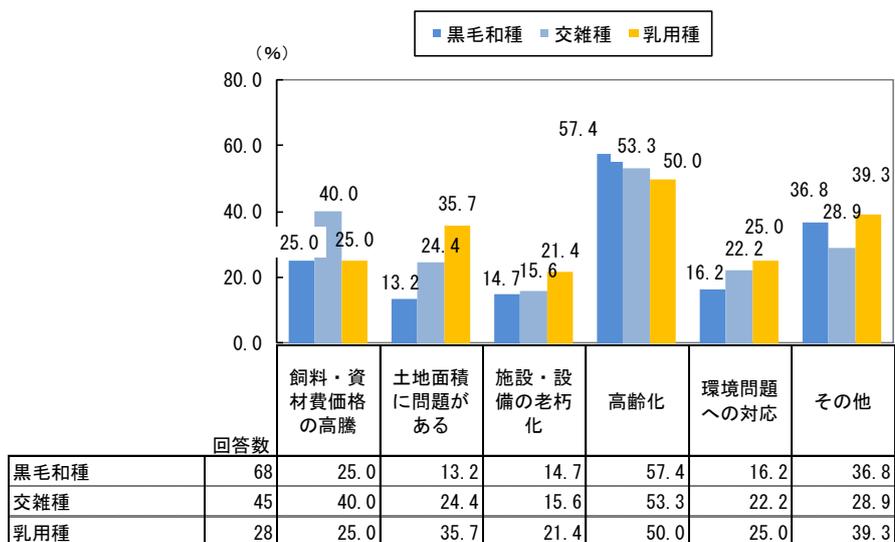


図 33 現状維持、または減少する理由(品種別)



※200頭以上